

# 元刊雜劇の研究（一）「尉遲恭三奪槊」全訳校注

赤松<sup>①</sup> 紀彦<sup>②</sup> 井上 泰山<sup>③</sup> 文京<sup>④</sup> 小松 謙<sup>⑤</sup> 佐藤 晴彦  
高橋<sup>⑥</sup> 繁樹<sup>⑦</sup> 高橋 文治<sup>⑧</sup> 竹内 誠<sup>⑨</sup> 土屋 育子<sup>⑩</sup> 松浦 恆雄

元刊雜劇を読むに当たって、かつては『元曲選』に代表される明代のテキストが使用されてきた。しかし近年の研究により、明代に刊行・抄写

されたテキストは大幅な改変を受けていることが明らかになった。元代当時の姿をある程度忠実に伝えるであろうテキストとして現存するのは、元代後期杭州で刊行されたのではないかと推定されている元刊本雜劇のみである。しかし三十種のみを残すこのテキストには、白（セリフ）が

ごく少ないか、もしくは全く収録されていないこと、誤字・当て字・脱字が多く、時として脱落も認められることなどの重大な問題があり、場合によってはストーリーを理解することすら困難な場合がある。それゆえに、これらのテキストはその重要性を認識されながらも、十分に利用されてきたとは言い難い。

しかし元刊雜劇を正しく理解するためには、元刊本雜劇の解説は不可欠の作業である。ここでは、テキストの乱れを可能な限り正すとともに、曲文の意味をできるだけ正確に解釈し、あわせて曲文と関連を有すると思われる先行文献・同時代文献をできるだけ調査するとともに、物語の内容についても、その系列の中でどのような位置を占めるかを明らかに

することに務めた。なお元刊本の書誌情報については金文京「元刊雜劇三十種序説」（『未名』三（一九八三年一月））を参照されたい。

本稿は京都大学人文科学研究所における「元代の社会と文化」研究班で行われた元刊本雜劇研究会の成果に基づいたものである。各担当者の原稿をもとに、討論の内容により修正を加えた。全体のまとめは小松が担当した。

## 凡例

- ① 異体字・俗字・誤字も含め、本文の用字については、ひとまず元刊本にできるだけだけ忠実な字を用い、その上で校勘を加えることとした。ただし、略字は正字体に改めてある。
- ② 押韻箇所は「。」、韻を踏まない句切れの箇所は「」で示した。「△」は句中藏韻（一句の中で更に韻を踏む字があるもの）を示す。
- ③ 明らかに字の誤りと思われるものについては、（ ）内に正しい字と思われるものを付け加えた。ただし、白話文学の世界で史書とは異なつた文字が通常用いられている場合（例えば徐世勳の字の懋功は、白話

文学では茂功または茂公と表記される)には、改めることはせず、注で指摘するにとどめた。原テキストには存在しないが明らかに脱字があると考えられる場合には、《》に入れて補うかたちを取った。また明らかに衍字と思われるものには《》を付した。

校勘に使用したテキストは、鄭騫『校訂元刊雜劇三十種』(世界書局一九六二。鄭本と略称)・徐沁君『新校元刊雜劇三十種』(中華書局一九八〇。徐本と略称)・寧希元『元刊雜劇三十種新校』(蘭州大学出版社一九八八。寧本と略称)・隋樹森『元曲選外編』(隋本と略称)である。また第二折については『雍熙樂府』(嘉靖四十五年(一五六六)序刊本。『四部叢刊續編』所収)及び『盛世新聲』(正徳十二年(一五一七)序刊本。文学古籍刊行社一九五五の影印本による)をも使用した。詳しくは第二折の校注を参照されたい。

なお字体は、原文・引用・人名は繁体字、その他は新字を使用した。

古杭新刊的本尉(尉) 遲恭三奪擲(掣)  
〔校〕○蔚遲……隋・鄭・徐・寧本は「尉遲」に改める。○三奪擲……隋・鄭・徐・寧本は「三奪掣」に改める。

〔注〕○古杭新刊の本……「古杭」は杭州のことと思われる。「的本」はしっかりした内容のテキストという意味。○元刊本末尾には「題目齊元吉兩爭鋒 正名 蔚遲恭三奪擲」と記されている。本劇は『録鬼簿』「尚仲賢」の項に著録されており、天一閣本(巻上「前輩才人有所編傳奇行於世者」)は「三奪掣 齊元吉兩爭鋒 尉遲恭三奪掣」、孟本は「三奪擲」、曹本は「尉遲恭三奪掣」と記す。『太和正音譜』「尚仲賢」の項

には「三奪掣」として著録する。『元曲選』巻頭の目録には「單鞭奪掣 一作三奪掣」とするが、これは『元曲選』所収の「單鞭奪掣」を尚仲賢作と見せるために編者臧懋循が行った操作であろう。「單鞭奪掣」は全く別の作品であり、『録鬼簿』『太和正音譜』などにも著録がなく、とりあえず無名氏の作と見なすべきものと思われる。現存するテキストは元刊本のみ。ただしこの雜劇の第二折の一部が『雍熙樂府』巻九に「叔寶不伏老」と題して収められる。詳しくは第二折の校と注を参照。

「三奪掣」の作者と思われる尚仲賢については、天一閣本『録鬼簿』に「眞定人。湘江省務提舉(曹本は「江浙行省務官」とする。天一閣本に付された賈仲明の「弔詞」に「四務提舉江浙省」とあることから考えて、曹本の方が妥当であろう。その他の履歴は不明だが、『録鬼簿』で置かれた位置から考えて前期の作者と思われる。「江浙」で勤務していたということは、南宋滅亡後に南下したのであろう。なお孫楷第『元曲家考略』は大名出身の尚從善、字仲良という当時名医として知られた人物が尚仲賢かもしれないと指摘するが、当否の程は不明。現存する雜劇のうち、他に尚仲賢の作とされるものとしては「柳毅傳書」「氣英布」がある。

「三奪掣」の物語は、早く『舊唐書』卷六十八「尉遲敬德傳」に「敬德善解避稍、每單騎入賊陣、賊稍攢刺、終不能傷、又能奪取賊稍、還以刺之。是日、出入重圍、往返無礙。齊王元吉亦善馬稍、聞而輕之、欲親自試、命去稍刃、以竿相刺。敬德曰、縱使加刃、終不能傷、請勿除之、敬德稍謹當卻刃。元吉竟不能中。太宗問曰、奪稍、避稍、何者難易。對曰、奪稍難。乃命敬德奪元吉稍。元吉執稍躍馬、志在刺之、敬德俄頃三

奪其稍。元吉素驍勇、雖相歎異、甚以為恥。(敬徳はほこをよけることに長けていた。いつもただ一騎で賊の陣に突入したが、賊どもが群がって突いてきても、最後まで傷つけることはできず、しかも巧みに賊のほこを奪って、逆にそのほこで相手を刺すことができた。この日〔單雄信に追われた李世民を救い、王世充の軍を破った日〕も、厚い包圍を自由自在に出入りした。齊王元吉も馬上でほこを使うのが得意だったので、そのことをきいて大したことはないと思ひ、自分で試そうとして、ほこの刃をはずさせ、柄で突き合おうとした。敬徳が言うには、「刃を付けていようとどうせ傷つけることはできないのですから、はずさないでください。私のほこは刃をはずさせていただきます」。元吉はどうしても突きあてることができなかった。太宗がたずねて言った。「ほこを奪うのと、ほこをよけるのでは、どちらが難しいか」。答えて言うには、「ほこを奪う方が難しゅうございます」。そこで元吉のほこを奪うよう敬徳に命じた。元吉はほこを構え、馬を躍らせ、何とか刺そうとしたが、敬徳はあつという間に三度ほこを奪った。元吉は元來勇猛であつたので、感心はしたが、ひどい恥辱と考えたのである」とある。同様の記事は、『新唐書』卷八十九「尉遲敬徳傳」・『隋唐嘉話』卷上・『太平廣記』卷四百九十三「尉遲敬徳」にも見える。

また明清の白話文学においては、諸聖隣『大唐秦王詞話』第三十八回と『隋唐兩朝史傳』第六十二回にもこの話が見えるが、他の『唐書志傳』『隋史遺文』『隋唐演義』『說唐全傳』などにおいては、『隋唐演義』第六十四回にこの話に近い内容が見えるだけで、他はいずれもこの話柄を欠く。なお、史書ではほこを使ってほこを奪うことになっているのが、

白話文学では鞭(鉄の棒に節を浮き出させた武器)を用いることになっている点は、尉遲敬徳と鞭の結びつきが強まったことの現れとして興味深い。

### 《第一折》

〔正先扮建成・元吉上 開〕咱兩個欲帶(待)篡位、爭奈秦王根底有尉(尉)遲、無人可敵。元吉道、我有一計、將美良川圖子獻與官里、道的不是反臣那甚麼。交壞了尉(尉)遲、哥一(哥)便能勾官里做也。

〔罵云了〕〔呈圖科〕高祖云了。大怒將尉(尉)遲那(拿)下〕〔末扮劉文靖將榆科園圖子上了〕

〔校〕○第一折……元刊本は折の区分がない。ここでは仮に区分を施した。以下同じ。○帶……隋・鄭・徐・寧本は「待」に改める。○元吉道……徐・寧本はト書きとし、これ以下の「我有一計……官里做也」を元吉の白とする。鄭本は「元吉道」をも建成の白とする。○將尉遲那下……徐・寧本は高祖の白とする。○那……隋・鄭・徐・寧本は「拿」に改める。○劉文靖……隋・徐・寧本は「劉文靜」に改める。○榆科園……隋・寧本は「榆窠園」に改める。

〔注〕○正先……鄭騫は未詳とし、「鐵拐李」第一折【金盞兒】に「劈先」という語が見えることを指摘して、「劈」と「正」の音が近いことから、同じ語ではないかと推定する。「鐵拐李」の用例は次の通り。「這老子我交他劈先里着司房中勾一遭更肩(有?)禍、案卷裏添一筆便違條(このじじいめ、真っ先に役所の中に連行してもっとひどい目にあわせ

てやる〔?〕。調書の中に一つ書き加えればそれで犯罪者だ〕。この「劈先」は「真つ先に」という意味であろう。ここでも同じ方向で解釈は可能である。また、建成・元吉の二人組をさすものとも考えられる。この二人は、他の雑劇にもよく見える二人組の浄（通常「二浄」と表記される。例えば元刊本「霍光鬼諫」）と思われるが、この「正先」を「浄」とは次元を異にする名称として理解することも可能であろう。その場合は、「劈先」の意味（「劈」は「劈頭」の「劈」と共通しよう）から考え、最初に出てくるキャラクターの名称ということになる。とすれば、元刊本には一度も見えないにもかかわらず明代のテキストには普遍的に現れる「冲末」と共通する性格を持つことになろう。なお、元刊本に記録されている白は原則として正末・正旦のものであり、ここで浄かと推定される建成の白が記されているのは例外的な事例といつてよい。同様に正末・正旦以外の白が記されている例としては、「紫雲庭」（一カ所のみ外旦の白あり）・「鐵拐李」（外末・旦・張千の白など多数）・「竹葉舟」（外末の白多数）・「焚兒救母」（外末・外旦・旦の白多数）がある。○開……元刊本のト書きには多く用いられている用語であり、最初に刊行された周憲王朱有燬の雑劇『周憲王樂府』や、嘉靖年間に刊行された『雜劇十段錦』、また内府本や于小穀本など明代に抄写された雜劇テキスト、更には一部の明刊本にも用例があるが、その意味は定かではない。芝居が始まることを「開場」といい、前口上のことを「開呵」ということと関係するのかもしれない。通常はこの場合同様、ある人物が登場した際に記されているが、朱有燬の「牡丹品」などには「色長（座長のこと）開云」と「衆」によるうたとの掛け合いという形式を取っている事例も

見られる。この点から考えると、詩をとなえること、もしくは口上を述べること（その双方でもよい）を意味するものではないかと思われる。○秦王……唐の太宗李世民のこと。『舊唐書』卷二「太宗紀上」「高祖受禪、拜尚書令右武侯大將軍、進封秦王、加授雍州牧」とある。李世民の肩書きとしての秦王は、その戦いを描写した舞曲「秦王破陣樂」（『舊唐書』卷二十九「音樂志二」その他に見える）などによって広く知られ、明代に刊行された『大唐秦王詞話』に至る。○建成……唐の高祖李淵の長子。高祖の後継の地位を李世民と争い、玄武門の変で弟の齊王元吉ともども殺害される。『舊唐書』卷六十四「高祖」二十「子傳」「高祖二十二年、太穆皇后生隱太子建成及太宗、衛王玄霸、巢王元吉、……」。○元吉道……徐・寧本はト書きとし、これ以下を元吉の白とするが、鄭本はこの句も含めてすべてを建成の白とする。元刊本のト書きはすべて「……云」と記されており、「……道」という例は見えない。「……道」の形は明代白話小説における発話を導く動詞として定型化されているものであり（後の版本ほどこの単語に統一される傾向にある）、また『成化說唱詞話』でも用いられている点から考えて、語り物の中で登場人物のせりふをあげる際に用いられる動詞である可能性が高いものと思われる。ここでは全体を建成の白として訳しておく。○美良川……『資治通鑑』卷一百八に「尉遲敬徳、尋相將還澮州、秦王世民遣兵部尚書殷開山、總管秦叔寶等邀之于美良川、大破之、斬首二千餘級」とあるように、史実としては尉遲敬徳が秦叔寶に破られた場所だが、白話文学の世界では、夜陣営から出た李世民を尉遲敬徳が追い、それを更に追った秦叔寶と死闘を繰り広げる隋唐物語最大のクライマックスであり、「三跳虹蜺澗」「兩鏑

換三鞭」などの名場面は人口に膾炙している。具体的記事を見出しうるのは明代以降の文献になるが、元代にはこの物語が広く知られていたことは、劉致の散曲「代馬詬冤」に「誰念我美良川扶持敬德（美良川の合戦にて敬徳を助けしことも思ってくれる者はない）」と見えることから明らかである。雑劇においても、「小尉遲」（内府本）第三折【鬪鶴鶉】に「俺兀自有美良川の威。榆科園の猛氣（まだ美良川の威風、榆科園の猛氣は持ち合わせておるわ）」というように、しばしば次の榆科園とあわせて尉遲敬徳の晴れ舞台として言及される。○不是「那甚麼……」でなくて何ですか」という意味。モンゴル語直訳体や、元の頃に行われていた「漢兒言語」と呼ばれるクレオール言語に多く見られる語法。例えば『老乞大』巻下「今後再斷見呵、不是好兄弟那甚麼（今度会つたら、いい兄弟というものじゃないか）。「不是」を伴わない例もある。『朴通事諺解』巻中「若官司知道時、把咱們不償命那甚麼（もしお上に知れたら、私たちは死刑になるじゃありませんか）」。○能勾官里做也……普通なら「能勾做官里也」となるところ。これも「漢兒言語」にはよく見られる語順の転倒である。○末……正末のこと。同様の例は「博望燒屯」「追韓信」にも見られる。○劉文靖……唐建国の功臣。正しくは劉文靜。『舊唐書』巻五十七に傳あり。李淵父子に拳兵を勧めて大功を立てたが、後に自らの処遇に不満を抱き、反逆の疑いをかけられて五十二歳で刑死。「魏徵改詔」雑劇や『大唐秦王詞話』に見られるように、白話文学の世界ではしばしば劉文靖と表記され、その死は尉遲敬徳を投降させるため、敬徳の旧主劉武周をだまし討ちにしたことの崇りとされるようになる。○榆科園……『舊唐書』巻六十八「尉遲敬徳傳」に「是日、因從獵于榆

窠、遇王世充領歩騎數萬來戰。世充驍將單雄信領騎直趨太宗、敬徳躍馬大呼、橫刺雄信墜馬。賊徒稍却、敬徳翼太宗以出賊圍（この日、榆窠で狩りの供をしたところ、王世充が歩兵・騎兵數万を率いて寄せてきたのに出くわした。世充配下の驍將單雄信は騎兵隊を率いてまっしぐらに太宗めがけて突っ込んで来た。敬徳は馬を躍らせ大喝すると、單雄信を馬から突き落とす。賊軍が少し退いたので、敬徳は太宗を助けて包圍を突破した）」と見える。後世、單雄信が非業の最期を遂げた英雄として信仰されたことと相俟って（單雄信が信仰されていたことは、『宋史』巻一百二「禮志五」に北宋期に勅命により單雄信を祀る廟を立てたこととあつたが、白話文学の世界では、「單鞭奪槊」（古名家本）第四折茂茂功の白に「今唐元帥與單雄信在榆科園交戰（いま唐元帥さまは單雄信と榆科園で戦っておられます）」というように、「榆科園」という庭園とされる（ただし本折の【油葫蘆】では「榆窠園」となっている）。【訳】「まっさきに建成・元吉に扮し登場、開」われら二人は帝位を篡奪しようともくろんでおりますが、いかにせん秦王のもとには尉遲恭がいて、対抗できる相手がおられます。元吉が申しますには、「一計があります。美良川の絵図を陛下に献上し、反臣でなくてなんでございませうと申し述べ、尉遲恭を殺してしまえば、兄さんは天子になれます」とのこと。「天子（高祖）言う」「絵図を献上する」「高祖言う」「激怒する。

尉遲恭を捕えさせよ(と言う)」「末が劉文靜に扮し、楡科園の絵図をもつて登場」

《仙呂》【點絳脣】想當日霸業圖王。豈知李氏把江山掌。雖不是外國它邦。今日做僚宰爲卿相。

〔校〕○李氏……徐本は「今上」に改める。通常【點絳脣】の第二句は、四字目で韻を踏む七字句という形式をとるのだが、「李氏」では韻を踏まない。徐校は「この句は押韻せねばならないので、『今上』に改める」とする。しかし、第二句で句中韻を踏まない例も二つだけある。「不伏老」〔脈望館抄本〕第一折【點絳脣】「煬帝東巡。主公未定中原困。那其間盜起紛紛。帝星照河東郡〔煬帝が東巡し、とのはまだ中原の苦しみをおさめてはおられませんでした。その時盜賊が次々と蜂起する中、皇帝をつかさどる星が河東郡を照らしたのです〕」及び無名氏【點絳脣】「問柳尋芳。惜花憐月心狂蕩。名姓高揚。處處人瞻仰〔柳やかぐわしいはなをたずね、花や月を愛して心狂わす。名はあがり、至るところで人から仰がれる〕」。ここも同様の踏み落としの例と見るべきであろう。なお、「不伏老」はやはり尉遲敬徳を主人公にする雜劇であり、曲文にも似通ったところがある点は注意される。○雖……徐本は「須」に改める。

〔注〕○霸業圖王……元刊本「追韓信」第四折【端正好】「方信圖王霸業從天命。成敗皆前定（はじめてさとするは、天下を取るのも天命に従い、成功と失敗はすべて運命の定めありということ）」など。○雖……このままでは意味を取ることが困難である。徐本は、「雖」の意味でよく「須」が用いられることと、「須不是」（〜ではないはず）という言葉が頻用さ

れることを根拠に「須」に改める。「須」であれば「他の国ではなくこの国で大臣になった」という方向で理解できないこともないが、明快に解釈できるというわけではない。また「雖」であるべきところが「須」になっている例はあるが、逆の事例はない以上、「須」に改めることには無理があるものと思われる。○外國它邦……「漢宮秋」（古名家本）第二折に「外云」他外國說、陛下寵昵王嬪朝綱盡廢、壞了國家（外が言う）外國が申しますには、陛下は昭君に溺れて、朝廷のおきては失われ、國をだめにしていくとのこと」とある。ここでいう「外國」は匈奴のこと。元刊本「東窗事犯」第二折【鬪鶴鶉】には「知你結勾他邦、可甚於家爲國（おぬしは他邦と通じおつて、何が國のためじゃ）。ここでいう「他邦」は金のこと。つまりいずれも異民族國家のことをさしている。あるいは非漢民族が高官となった元の状況を反映するものか。○僚宰……おそらく「百僚宰臣」または「臣僚宰執」の略。高級官僚のこと。馬致遠の【撥不斷】に「子房鞋。買臣柴。屠沽乞食爲僚宰。版築躬耕有將才（張子房が拾った靴、朱買臣が売った薪。屠殺人や乞食が大臣になり、人夫や農夫に將の才あり）」というのが元曲では唯一の用例である。

〔訳〕その昔天下を争つて鬪つたが、はからずも李氏が天下を取った。外國の地や他国ではないが（？）、今日こうして大臣となり宰相となった。

【混江龍】不着些寬紅（洪）海量。剗地信讒言佞語損忠良。誰不曾忘生捨死、誰不曾展土開疆（疆）。不枉了截髮搓繩穿斷甲、征旗作帶勒金瘡。

我與你不避金瓜下喪。直言在寶殿、苦諫在昭陽。

〔校〕○寛紅……鄭・徐・寧本は「寛洪」に改める。○開疆……隋・鄭・徐・寧本は「開疆」に改める。○征旗……寧本は「扯旗」に改める。

〔注〕○寛洪海量……度量の広いこと。元刊本「遇上皇」第一折【鶻踏枝】「我有酒後寛洪海量。没酒後腹熱腸荒（私は酒を飲めば寛仁大度、酒がなければいらいら募る）」、元刊本「霍光鬼諫」第三折【三煞】「豁達大度。海量寛洪、納諫如流（闊達にして度量大きく、寛仁大度、諫言をどんどん聞き入れる）」といった用例がある。鳥占いの書である『演禽通纂』卷下（成立年代不明。明代か）に「寛洪海量、納諫如流」と「霍光鬼諫」と同様の表現があるほか、やはり占いの本である『三命通會』にも例があり、民間でよく用いられる類型表現だったことがわかる。○忘生捨死……命がけて戦うこと。元刊本「薛仁貴」楔子【端正好】「你待忘生捨死在沙場上（お前は戦場で命をかけるつもりか）」、元刊本「霍光鬼諫」第二折【石榴花】「我也曾亡生舍死沙場上戦（わしは戦場で命をかけたこともあった）」など用例は多い。○展土開疆……領土を広げること。元刊本「西蜀夢」第二折【梁州】「再靠誰展土開疆（これから誰に頼って領土を広げればよいのか）」など用例は多いが、文人の書いた公式の文献にも、元の許謙の「總管黑軍舒穆魯公行状」（『白雲集』卷十七）に皇帝から賜った制の概略をあげる中で「祖野仙有展土開疆之效（祖父エセンには領土を広げた功があり）」と見え、民間のみで用いられたものではないようである。○截髮搓繩穿斷甲、征旗作帶勒金瘡……元の元准の「歴渉」（元准『金困集』）『涵芬樓秘笈』所収。なお『元詩選』には作者の解説にこの二句のみが引かれる。この句はよく知られて

いたらしく、清の姚之駟の『元明事類鈔』卷二十八にも引かれる）という詩に「截髮搓繩聯斷鎧、捲旗作帶繫金創」という句があり、「檢窠詞」と末尾に自注がある。元准がこの詩に付した「引」によれば、この詩は乙亥の年から甲申の年にかけて、元准が福建の反乱を鎮定したことを回想して作ったものとのことであり、これは彼の事績や歴史的事実から考えて一二七五年から一二八四年、つまり南宋滅亡と相前後する時期のことになる。江浙行省に勤務していた尚仲賢は、溧陽路總管だった元准と接点があった可能性がかなりある。また元准には「琵琶聲斷黑河秋」という句を含む「弔昭君」という詩もあり、「馬致遠詞」という自注がついている。これも明らかに「漢宮秋」と関係を持つものといつてよい。とすれば、「三奪槩」についても詩の方が曲を踏まえた可能性があるということになる。○金瓜……武器。近衛の衛士が所持するもの。元刊本「介子推」第二折【牧羊關】「若不交太子短劍下身亡、微臣便索金瓜下命休（太子さまを短劍の下の死からお救いするためなら、私は金瓜の下で命果てて見せましょう）」など多数。○昭陽……昭陽殿は漢の宮殿だが、宮殿一般を指す言葉としてよく用いられる。「漢宮秋」第一折【賺煞】「到明日多管是醉臥在昭陽御榻（明日になればおそらくは昭陽の寝台に酔い臥していよう）」など用例多数。

〔訳〕太つ腹な度量を用いようともせず、なんとまあ讒言佞言を信じては忠臣良臣をあやめられようとは。命を的にいくさをし、国土広げたものを。髪を切つて紐に編んで破れた鎧を繕い、戦旗を包帯にして傷を縛つたのもむだであったわ。金瓜でなぐられ命を失おうとかまいはせぬ。御殿にて直言し、昭陽の宮にてきつく諫言してくれよう。

【油葫蘆】陛下想當日背暗投明歸大唐。却須是真棟梁。剗地廝く。□□  
 □□低（隄）防。比及武官砌壘个元戎將。文官掙揣个頭廳相。知它是幾  
 个死、知它是幾處傷。今日太平也都指望請官賞。掙地胡羅惹斬在雲陽。

【校】○廝く低防……隋本は「廝廝隄防」、鄭本は「□□□□廝隄防」、  
 徐本は「廝□□□廝隄防」、寧本は「□□□□廝隄防」とする。この句は七  
 字句であるはずで、おそらく「く」は「廝」の反復を示すものではなく、  
 ここに三字以上の省略があることを示しているものと思われるが、どの  
 ような文字が入るのかは不明。

【注】○背暗投明……劣った者をからすぐれた者の方に転身する。元刊  
 本「氣英布」第二折【梁州】「不由我實丕丕興劉滅楚、却這般笑吟吟背  
 暗投明（やむなくまことに劉氏を興し楚を滅ぼそうと、かように喜び勇  
 んで暗きを捨てて明るきに投じたものを）」など。○真棟梁……まこと  
 の国家の柱石。『三國志平話』卷上「漢室傾危不可當、黃巾反亂遍東方。  
 不因賊子胡行事、合顯擎天真棟梁（漢王朝傾き手の施しようもなく、黃  
 巾の反亂東方に満ちる。賊がたわけた振る舞いすればこそ、天を支える  
 まことの柱石世に出でた）」。○隄防……用心する。『董西廂』  
 卷五【尾】「還二更左右不來到。您且聽着。隄防牆上杏花搖（もし二更  
 の頃にもお越しがなくなれば、まずは耳そばだてて塀の上なる杏の花が揺れ  
 るのにご用心あれ）」。○砌壘……積み上げること。湯式【賽鴻秋北】套  
 【笑和尚北】「再將楚陽臺砌壘的牢。重蓋一座祇神廟。磚甃了桃源道（今  
 一度楚の陽臺をしつかと積み上げ、今一度祇神廟を築き直し、桃源の道  
 を舗装しよう）」。ここでは手柄を積みことと、例えば『西廂記』（弘治  
 本）卷二第四折で張生が紅娘に「計將安出。小生當築壇拜將（はかりご

とやいかに。それがし壇を築いて將と仰がせていただきませう）」とあ  
 るように、韓信の故事に基づいて、壇または臺を築いて將軍に任命する  
 という「築（または登）壇（または臺）拜將」という成語表現をかけて  
 用いたものであろう。○元戎將・頭廳相……「元戎」は『毛詩』「小雅」  
 の「六月」に「元戎十乘」とあるように、元來は大型戦車のことだが、  
 転じて司令官を意味するようになった。「頭廳相」は宰相のこと。唐の  
 尚顔の「將欲再遊荆渚留辭岐下司徒」詩に「今朝回去精神別、爲得頭廳  
 宰相詩（今日帰り行く気分は格別、宰相様の詩をいただきましたゆえ）」  
 と見える。この二語を対で使う例としては、元刊本「東窗事犯」第一折  
 【油葫蘆】の「楊戩是个幫閒攢懶元戎將。蔡京是个傳書獻簡頭廳相（楊  
 戩は太鼓持ちの総司令官、蔡京は文使いの宰相殿）」など多数ある。○  
 羅惹……よからぬことを引き起こすこと。本劇第三折【駐馬聽】に「剗  
 地信別人閑議論。將俺胡羅惹沒淹潤」と見える。そのほか「謝天香」（古  
 名家本）第二折【梁州】に「這爹爹記恨無輕放。怎當那橫枝羅惹、不許  
 隄防（この殿様は恨みをこころに刻んで簡単には許してくれず、いわれ  
 もなくよからぬことをひきおこして、防ぎようもない）」などの例があ  
 る。

【訳】陛下、思えばむかし、（尉遲恭は）「暗きに背き明るきに投ず」と  
 申しますように大唐王朝に帰服したものでした。しかし国家の屋台骨と  
 なるはずの彼に對して、どうして警戒なさいませ。武將が壇を築いて大  
 將軍となり、文官が必死に頑張つて宰相となるまでには、何度死にかけ、  
 いくつ傷を負ったことでしょう。今日平和な世となり、誰しも皆褒賞を  
 当てにしているところ、突然いわれもなき罪に問われて刑場で斬首され



るとは。

【天下樂】誰似俺出氣力功臣不氣長。想當時、反在晉陽。若不是唐元帥少年有紀綱（綱）。義伏了徐茂公、禮設（説）了褚遂良。智降了蘇定方。

〔校〕○禮設了……徐本は「禮懾了」、寧本は「禮説了」に改める。

〔注〕○氣力……精神・肉体両面の力をあわせていう。元刊本「東窗事犯」第三折【絡絲娘】「臣捨性命出氣力請粗糧將邊庭鎮守（それがしは命をかけ、力尽くし、粗末な食料を求めて国境を守ったものを）」、元刊本「趙氏孤兒」楔子【賞花時】「把俺雲陽中斬首。兀的是出氣力下場頭（刑場にてわれらの首をはねる、これぞ力尽くしたなれのはて）」など、「出氣力」がむだであったとするのは元曲の類型表現。○不氣長……なさない。元刊本「老生兒」第三折【調笑令】「咎（嗒）一雙。老孤椿（椿）。爲沒兒孫不氣長（われら二人の老いぼれば、子孫なきゆえなさない）」、元刊本「看錢奴」第三折【後庭花】「他見有鈔的都心順、子俺這無錢的不氣長（奴は金持ちを見れば言いなり、むしろ金のない者ばかりは情けないものじゃ）」など用例は多数。○晉陽……今の山西省太原。『舊唐書』卷五十七「劉文靜傳」に「隋末、爲晉陽令」とあるように、劉文靜は当時晉陽の長官で、太原留守であった李淵の拳兵に当初から参画した。○唐元帥……太宗李世民は演劇の世界では通常この名で呼ばれる。「單鞭奪槊」（古名家本）楔子「末同茂公引卒子上云」某姓李、名世民、見爲大唐元帥（（正）末、徐茂公とともに兵士をつれて登場）それがし姓は李、名は世民、いま大唐元帥の職にあります」。○紀綱……ここでは謀略の意味。「單鞭奪槊」（古名家本）第一折【那吒令】「這漢

有紀綱。知成敗。怎有他這般人材（この男は謀略もあり、興亡のこともわかまへ、かような人材またとおらぬ）。○徐茂公……唐の功臣李勣のこと。『舊唐書』卷六十七「李勣傳」に「李勣、曹州離狐人也。…本姓

徐氏、名世勣」とあるように、元来の名は徐世勣であったが、唐王朝の李姓を賜って李世勣となり、更に太宗李世民の諱を避けて李勣と名を改めた。字は懋功だが、白話文学の世界では徐茂公もしくは徐茂功の名で知られ、李世民の軍師役として活躍し、史実よりはるかに年長の中年の人物としてイメージされる。元来群雄の一人李密の配下であり、李密が唐に降った時、その領土を統括していたが、李密の許可を得てはじめて降伏し、後に李密が滅びるとその葬儀を行った。後の『大唐秦王詞話』第十七回では、この折李密の首を哭しながら命を助けられた魏徵が、徐茂功を説いて唐に降らせることになっており、更に『説唐』では哭禮を行ったのは魏徵と徐茂功で、李淵の命により捕らえられるが、李世民に救われ、李密の葬儀を行うことを条件に降伏することになっている。「義伏」という言い方からは、『説唐』に類似した物語があったものと推定される。○褚遂良……唐の太宗・高宗に仕えた重臣。書家として名高い。重臣褚亮の子。『舊唐書』卷八十「褚遂良傳」に「大業末、隨父在隴右、薛舉僭號、署爲通事舍人。舉敗歸國、授秦州都督府鎧曹參軍」とあるように、彼が唐の臣下になるにあたって特に知られた逸話があるというわけではない。原文「禮設」では意味を取りにくい。徐本は「禮懾（禮に より恐れさせる）」とするがやはり不自然。ここでは字形の類似から考えて、寧本の「禮説」に従って訳す。○蘇定方……唐の武将。『舊唐書』卷八十三に伝がある。その記述によれば、はじめ群雄竇建徳、ついで劉

黒闔の配下に入ったが、劉黒闔が滅んでからは故郷に帰り、唐王朝が確立した後にその軍に入り、異民族征討に大功を立てたことになっている。しかし白話文学の世界では、蘇定方は劉黒闔の部将として、隋唐物語の主人公の一人羅成を畏にはめて射殺する敵役である。『大唐秦王詞話』第五十二回では、劉黒闔滅亡後も降ろうとしないが、その武勇を惜しんだ李世民が蘇定方の母を人質にとって降参させ、配下に加えるということになっている。「智降」というのは、おそらく元代にはすでにこうした物語があつたことを示唆するものであろう。

〔訳〕我ら力を出しきり、手柄を立てた功臣ほど情ないものがあるうか。思えばそのむかし晉陽で反旗を翻したとき、もし唐天帥が年若い身で謀略に長けていなければ、どうして義により徐茂公を降伏させ、禮を尽くして褚遂良を説得し、知恵を使つて蘇定方を投降させることができたであらう。

【醉扶歸】當日都是那不主事肖（蕭）丞相。更合着那沒政事漢高皇。把韓元帥葫蘆蹄斬在未央。今日个人都講。若有舉鼎拔山的霸王。哎漢高呵你怎敢正眼兒把韓侯望。

〔校〕○肖丞相……各本「蕭丞相」に改める。

〔注〕○不主事肖丞相……「肖丞相」は蕭何のこと。「主事」は政務をつかさどること。『孟子』「萬章上」「使之主事而事治、百姓安之（政務をつかさどらざれば政務はうまく運び、民は安心する）」。ここでは漢の高祖の功臣に対する無道を諷することにより、遠回りに唐の高祖を批判しているのであろう。韓信は尉遲敬徳を暗示するものと思われる。○更合

着……さらに。その上。「秋胡戲妻」第二折【呆古朶】「早則俺那婆娘家無依倚。更合着這子母每無箇壁（私たち女どもは寄る辺なき身となる上に、しかもこの母子も頼るものがない）」。○葫蘆蹄……「葫蘆提」「葫蘆題」「葫蘆提」「葫蘆蹄」などさまざまな表記がある。でたらめ。いいかげん。『董西廂』卷一【哨遍纏令】【尾】「一夜葫蘆提鬧到曉（一晚中いい加減に朝まで騒ぎ通した）」など用例は多数。○斬在未央……『史記』卷九十二「淮陰侯列傳」には「呂后使武士縛信、斬之長樂鍾室（呂后は武士に命じて韓信を縛らせ、長樂宮の鍾室で斬った）」とあるが、元曲では韓信は未央宮で斬殺されたことになっている。陳草庵【山坡羊】「嘆蕭何、反調唆、未央宮羅惹韓侯過。千古史書難改抹（嘆ずべきは蕭何の、逆にそそのかしておいて、未央宮にて韓信をわなにかけたこと、とこしえに史書より消しがたし）」。芸能の世界で未央宮とされていたことは、『全相前漢書平話續集』卷上に「武士押信至未央宮下、建法場（武士は韓信を未央宮の下まで護送して、刑場を用意します）」とあることからわかる。○舉鼎拔山……「舉鼎」は『史記』卷七「項羽本紀」に「力能扛鼎」とあること、「拔山」は言うまでもなく「垓下歌」の「力拔山兮氣蓋世」に基づくが、元曲ではしばしば項羽の武勇の形容としてこの語が使用される。元刊本「追韓信」第三折【二煞】「恁時節暗嗚叱咤難開口、便舉鼎拔山怎脱身（その時は大喝せんとすれど口を開きがたく、鼎を挙げ山を抜く力があるうといかでか逃れ得よう）」。○正眼兒……後に「見る」という意味の動詞を伴って正視することをあらわす。「哭存孝」第二折李存孝云「殺王彦章不敢正眼視之（王彦章を打ち破つてこちらを正視できなくしてやりました）」など。

〔訳〕そのむかしかの政務に精出さぬ丞相蕭何と、更に加えて政治に身を入れぬ漢高祖とのせいで、元帥韓信はうやむやのうちに未央宮にて斬殺されてしまった。今では、もし鼎を持ち上げ山を抜くほどの霸王項羽がいたならば、オイ漢高祖よ、お前は韓信の顔をまともに見ることができると、みんな言っている。

〔後庭花〕陛下則將這美良川里冤恨想。却把那榆窠園里英雄忘。更做道世事縵（雲）千變、敬德呵則消得功名紙半張。陛下試參詳。更做道貴人多忘。咱數年間有倚仗。

〔校〕○縵……隋・鄭・寧本は「雲」に改める。

〔注〕○世事雲千變……世間は移り変わりが激しい。『中州集』卷三に収める王庭筠の「書西齋壁」詩に「世事雲千變、浮生夢一場。偶然携拄杖、來此據胡床（世事は雲の如く果てしなく変化し、浮き世は一場の夢の如し。ふと杖を持って、ここに来て椅子にもたれる）」とあり、また元の曹伯啓の「悼幼子」（『曹文貞公詩集』卷三）にも「世事雲千變、人生夢一場」、同じく元の王旭の「至元十三年寄平原縣段郁文」（『蘭軒集』卷一）にも「別來不可説、世事雲千變」とある。当時よく用いられる類型表現であつたらしい。元曲においては、元刊本「西蜀夢」第二折〔牧羊關〕「世事雲千變、浮生夢一場」など。○功名紙半張……打ち立てた功名も紙べら半分ほどの値打ちしかない。楊萬里「燈下讀山谷詩」（『誠齋集』卷七）「百年人物今安在、千載功名紙半張（百年この方のすぐれた人物も今はいずこ、千年に残る手柄も紙べら半分）」と見えるのが早い例。あるいはこの詩が典故となつたのかもしれない。元刊本「東窗事

犯」第一折「天下樂」〔戰沙揚（場）幾個死、破敵軍幾處傷。兀的是功名紙半張（戰場に戦い幾度死にかけ、敵軍を破つて幾つ傷を負つたことか。これぞ手柄も紙べら半分と申すもの）〕、元刊本「西蜀夢」第二折〔收尾〕「不能勾侵天松柏長三丈。則落的蓋世功名紙半張（墓に天を衝く松柏のびること三丈というわけにもいかず、蓋世の手柄も紙べら半分ということに成りはてた）」など用例多数。○更做道……「便做道」に同じ。たとえである。『董西廂』卷四〔攪箏琶〕「官人每更做擔饒你、須監收得你幾夜（お役人さまがたはたとえ許してくれようと、あなたも幾晩かはぶち込まれずにはすまないでしょう）」。元刊本「調風月」第二折〔公篇〕「更做道能行怎離得影（たとえ動くことはできようとどうして影を離れられよう）」など。○消得……ここではつりあうといった意味。柳永「惜春郎」〔潘妃寶釧、阿嬌金屋、應也消得（潘妃の腕輪、阿嬌の金の家もふさわしい）〕など。○貴人多忘……貴人は物忘れ多し。通常は出世した相手を皮肉る文句として用いられる。『唐摭言』卷二「悲恨」〔王泠然與御史高昌宇書曰……儻也貴人多忘、國士難期（王泠然が御史高昌宇に送つた手紙に言う……貴人は物忘れ多く、國士の出現は予期しがたいとは申しまでも云々）〕。宋代には楊萬里が好んでこの諺を引いている。元刊本「魔合羅」第三折〔浪來里〕「哎張鼎你大古里貴人多忘（やれ張鼎よ、お前は全く貴人は物忘れ多しというやつじゃな）」など用例多数。○倚仗……頼る。『劉知遠諸宮調』卷三「賀新郎」〔你言語也不中倚仗（おぬしの言葉とてあてにはならぬ）〕、『董西廂』卷二「甘草子」〔倚仗着他家有手策。欲反唐朝世界（自分の腕を頼りとして、唐朝の天下に背こうとする）〕ほか。

〔訳〕陛下におかれては美良川での恨みにばかり思いを致され、檢窠園での英雄ぶりをお忘れになつておられる。たとえ世事は雲の如くに千変万化とは申せ、敬徳よ、おまえの功名が紙べら半分ほどの値打ちしかないとは。陛下、考えてもご覧下さいませ。たとえ「貴人は物忘れ多し」とは申せ、われらはこの数年頼りにしてまいりました。

【金盞兒】那敬徳自歸了唐。到咱行。把六十四處烟塵蕩。殺得敵軍膽喪。△馬到處不能當。苦相持一萬陣、惡戰〱九千場。全憑着竹節鞭、生併了些草頭王。

〔校〕○苦相持・惡戰……この部分は一句五字からなる対句のほずである。徐本は本劇第二折【一枝花】の「雄糾糾の陣面上相持、惡暗暗的沙場上戰討」と【隔尾】の「經到四五千場惡戰討」を根拠に「惡戰討」に改め、寧本は「惡戰闘」とするが、いずれも決定的な根拠に欠け、確かなことはいえない。

〔注〕○行……「行」で「行」に「行」で。助詞としての機能を持つ。異民族の言語から中国語に流入したものとされる。○六十四處……隋末には十八人の年号を称する、つまり帝王を自称する群雄と、六十四箇所の反乱者が出現したとされる。本劇第三折【沈醉東風】「滅了六十四處煙塵（六十四箇所の謀反人を滅ぼした）」。【單鞭奪槊】（古名家本）第二折【尾聲】「収六十四處干戈一掃休。十八般戰塵直交一鼓収（六十四箇所のいくさをひとなぎに始末し、十八箇所の戦いも一度に鎮めてくれよう）」。具体的な名前については、『大唐秦王詞話』第一回到「十八處」についてはすべて、「六十四處」については主な者が列挙されている。

○竹節鞭……尉遲敬徳の武器。『大唐秦王詞話』第二十二・二十三回到この武器の由来に関する物語が記されている。尉遲敬徳が立身のため劉武周のもとに向かう途中、宿泊した家で鉄妖を鎮め、それを六丁神が鍛えて二振りの竹節鞭とその他の武器一式にした。六丁神から鞭法を伝授された尉遲敬徳は、妻のもとに鞭のうち一つを置き、息子が生まれた時の証拠とするよう命じる。従つて、通常の「雙鞭」とは異なり、尉遲敬徳の鞭は「單鞭」である。同様の設定は元雜劇にも認められ、例えば敬徳と息子の寶林の再会を扱った「小尉遲」でも鞭が証拠の品となる。同劇内府本の穿關（衣装の詳細を記したもの）にも、尉遲敬徳の所持品として竹節鞭が見える。○生併……「併」は思い切つてやること、転じて戦うこと、殺すこと。元刊本「單刀會」第一折【點絳脣】「當日五處鎗刀。併了董卓誅了袁紹」（そのむかし五カ所に兵乱起こり、董卓を殺し袁紹を誅し）。「生」はむざと。「生併」で残酷に激しく戦うことである。元刊本「東窗事犯」第一折【天下樂】「到如今宋室江山都屬四國王。町々も荒れ果てた」、及び同じく第一折【賺尾】「生併的南伏（服）北降。出氣力西除東蕩（戦つて南北を降し、頑張つて東西を平定した）」。ここでは激しく戦つて滅ぼしたということであろう。○草頭王……賊の首領、また僭主。「氣英布」（元曲選本）第二折隨何云「却要去做草頭大王、好沒志氣也（なんとまあ山賊になろうだなんて情けない）」。僭主のことをさす例としては、『水滸傳』（容與堂本）第九十七回到「幫源洞中、活捉草頭天子（幫源洞の中にて、草頭天子を生け捕りに）」と方臘のことをいう事例がある。

〔訳〕かの尉遲敬徳が唐朝に帰順し、われらの處に来てより、六十四の群雄を平らげ、敵軍の心胆を寒からしめ、向かうところ敵なしでした。はげしく合戦すること一万陣、つらい戦い九千回。すべて竹節鞭ひとつを頼りに、僭主どもを滅ぼしてしまつたのです。

【賞花時】元帥不合短箭輕弓觀它洛陽。怎想濶劍長槍埋在淺崗。映着秋草半蒼黃。初間那唐元帥怎想。腦背後不低〔隄防〕。

〔校〕○低防……隋・鄭・寧本は「隄防」、徐本は「堤防」に改める。

〔注〕○不合……不届きにも。法律文書などによく用いられる。『元典章』「刑部」卷十一「遇格免徵倍贓」「朱聰招伏、不合於大徳二年九月二十四日、糾合鄧宥、一同偷盜陳成中様黄牛一隻宰殺……（朱聰が供述するには、「不届きにも大徳二年九月二十四日、鄧宥と語らつて陳成の中ぐらゐの雌黄牛一頭を盗んで屠殺し……）」。○短箭輕弓……軽い武装のさま。元刊本「拜月亭」第四折【駐馬聽】「我貪着个輕弓短箭。粗豪勇猛惡因縁（私が相手にするのは弓矢を持ち、粗暴勇猛な悪因縁）。また「薛仁貴」（元曲選本）第一折薛仁貴云「我則今日私離了邊庭、帶領數十騎輕弓短箭、善馬熟人、回家探望父母走一遭去（本日こつそり辺境を離れ、輕装にて數十騎、おとなしい馬に乗つた親しい者を伴い、父母を見舞いにまいるとしよう）」、『三國志平話』卷下に「關公輕弓短箭、善馬熟人、攜劍、無五十餘人、南赴魯肅寨（關公は輕装にて、おとなしい馬に乗つた親しい者をつれ、劍を持ち、五十あまりにも満たぬ人数で、南なる魯肅の陣營に赴いた）」とあり、「輕弓短箭、善馬熟人」が定型表現化してゐることがわかる。○洛陽……白話文学の世界では、榆窠園は

洛陽の郊外にあることになつてゐた。『大唐秦王詞話』第三十六回の榆窠園のくだりに「秦王……登魏宣武陵周圍觀看（秦王は……北魏の宣武帝の陵〔洛陽郊外にある〕に登つて周圍を見回した）」とあり、また「單鞭奪槩」（古名家本）第二折單英雄信云「今有唐元帥無禮、領兵前來偷觀俺洛陽城、更待干罷（唐元帥めがけしからぬことに、兵を率いて我らの洛陽城をこつそり見に来おつた。このままには捨て置けぬ）」とある通りである。○濶劍長槍……幅広の劍と長い槍（日本の槍とは異なり、ほこなどの長い武器の総称）。元好問「俳體雪香亭雜詠十八首之一」「六經管得書生下、濶劍長槍不信渠（經書は書生をしばることができようが、劍と槍とはどうにもならぬ）。元刊本「單刀會」第三折【柳青娘】「按（暗）藏着濶劍長槍（こつそりと劍と槍持つ武装兵を隠している）」など。○映着……「映」は前にあるものが後のものを隠すこと。また、後のものの中から前のものが見え隠れすること。二音節化すると「掩映」となる。杜甫「蜀相」詩「映階碧草自春色、隔葉黃鸝空好音（階段をおおう緑の草は勝手に春の色を萌え立たせ、葉の向こうの黄色いうぐいすが好い声で鳴くのもあだなこと）」。『梧桐雨』（古名家本）第四折【雙鴛鴦】「渾一似出浴的舊風標。映（映の異体字）着雲屏一半兒嬌（風呂上がりの昔の姿そのまま、屏風の陰に半ば隠れて色気あるさま）」など。○蒼黃……秋草の色。元の許謙「馮公嶺」詩（『白雲集』卷一）「寒松荒草間蒼黃、照眼崢嶸三十里（寒々とした松と枯れ草は蒼黄の色をいりまじらせ、眼にうつるは高くそびえる三十里の山）。○初間……初め。『董西廂』卷三【木魚兒】「初間典郡城、一方賊盜沒（はじめに郡の長官となるや、その地から盜賊は消え）。○腦背後不隄防……「不隄防」は突

然、思いがけず。ここでは突然の事件というところ。背後に突然の危険が迫る。曾瑞卿【鬪鶴鶉】套「風情」【尾】「貪顧戀眼前甜。不堤防背後閃（目の前の甘いえさに執着しているうちに、突然後ろから棄てられてしまった）」。

〔訳〕元帥様はあるまじきことに軽弓・短矢という軽装で洛陽を見に行かれました。あに凶らんや、大刀・長槍が低い岡に潜み、半ば黄色く色づいた秋草のかけに見え隠れしようとは。当初、かの元帥様は背後から突然危険が迫るなどとは思ってもみられませんでした。

【么】呀則見那骨刺又（刺）征旗遮了太陽。赤力又（力）征鼙振動上蒼。那單雄信恁高強。它猛觀了敵軍勢況。忙撥轉些（紫）絲纒。

〔校〕○呀……鄭・徐本「呵」とする。鄭本は覆本に基づくものである。う。「呵」に近い字形だが、「呀」に間違いないものと思われる。○些……隋・鄭・徐・寧本いずれも「紫」に改める。

〔注〕○骨刺刺……「古刺刺」「忽刺刺」「忽喇喇」とも表記する。旗が風にはためく様。元刊本「氣英布」第四折【刮地風】「火火古刺刺兩面旗舒（はたはたと二つの旗のび）」。○赤力力……ものがひらひらすることを形容する語として用いられることが多いが、『西廂記』（弘治本）卷二第一折【一】に「脚踏得赤力力地軸搖、手扳得忽刺刺天關撼（足で踏ん張ればぐらぐらと地軸が揺れ、手で引けばがららと天の星もゆらぐ）」とあるように、ものが揺れたり崩れたりする様をあらわす擬態語もしくは擬音語としても用いられる。ここでは後者であろう。○撥轉……めぐらす。「薛仁貴」（元曲選本）第一折張士貴云「驚的我這魂不在頭上、

就撥轉馬頭、一轡兜跑了（びっくり仰天、魂も身に沿わず、馬首をめぐらせ、雲を霞と逃げてきた）」など。○紫絲纒……紫の手綱。『樂府詩集』卷四十九「清商曲辭六」の「青驄白馬」に「青驄白馬紫絲纒（あおうまと白馬に紫の手綱）」とあり、以後多く用いられる。

〔訳〕やつ、見ればはたはたと風になびく戦旗は太陽を覆い、ドンドンと鳴り響く陣太鼓は天をも震わす。かの單雄信はまことに強い奴。秦王は敵軍の様子をハッと見てとるや、紫のたづなを引いて馬の向きを変えられました。

【勝葫蘆】打得正不刺く（刺）征驍走電光。藉不得衆兒郎。過澗沿坡尋路荒（慌）。過了些亂烘烘（烘）的荆棘、密稠稠（稠）榆柳、齊臻又（臻）長成行。

〔校〕○藉不得……徐本は「借不得」に改める（力を借りることができないと解釈したものか）。寧本は「籍不得」とするが、おそらく誤植であろう。○荒……鄭・徐・寧本は「慌」に改める。

〔注〕○不刺刺……馬の勢いよく駆けるさま。「撲刺刺」とも表記する。本劇第二折【梁州】「這些時但做夢早和敵軍對壘、才合眼早不刺刺地戰馬相交（この頃では夢を見さえすればはや敵軍と向かい合い、目を閉じさえすればはやパカパカと戦馬がかけちがう）」、第四折【伴讀書】「不刺刺征驍似紗燈般轉（パカパカと戦馬は走馬燈の如くに駆けめぐる）」、元刊本「范張雞黍」第三折【逍遙樂】「打的這匹馬不刺刺的風團兒馳驟（この馬に鞭打ってパカパカと風の如くに駆けらせる）」など。○兒郎……兵士。李翱が書いた韓愈の行状に、韓愈が反乱軍の兵士に対して「兒

郎等且無語聽愈言」と呼びかけるくだりがある。陸游「涼州行」（『劍南詩稿』卷二十九）「勅中墨色如未乾、君王心念兒郎寒（上着を配布する）」、勅書の墨はまだ乾かず、我が君は兵士らの寒さを思いやっておられる）、『劉知遠諸宮調』卷十二【蘇幕遮】「五百兒郎、盡索遭摧折（五百の兵ことごとく打ち破られんとする）」、『董西廂』卷三【吳音子】「五百來兒郎、一箇箇刁厥（五百ほどの兵はことごとく猛々しい）」ほか。○藉不得……顧みていられない。元好問「續小娘歌」十首之二「萬落千村藉不得、城池留着護官軍（あまたの村を構ってはおられず、町に守備の官軍を残すばかり）」、元刊本「趙氏孤兒」第四折【鬪鶴鶉】「這個更藉不得兒孫、這個更救不得父母（こちらは子孫をかまっていられない、こちらは父母を救うこともできない）」。「兵士たちを構っておられず見捨てて逃げる」「兵士たちに頼るひまもない」という二通りの解釈が可能だが、ここでは前者に訳しておく。○過澗沿坡……『大唐秦王詞話』第三十六回に李世民が追いつめられた状況を「又被峻嶺山溪擋住人（またしても険しい山と谷川にさえぎられました）」とうたい、「一邊是高山峻嶺、一邊又是闊溪澗（一方は高い山、一方は幅広い谷川）」と説明するのはここでいう状況に近く、すでに話のパターンが定まっていたことを思わせる。○密稠稠榆柳……『大唐秦王詞話』第三十七回に「怎麼爲榆窠園、一林都是榆樹、所以爲名。秦王一騎馬跑入樹林內躲避（なぜ榆窠園というかと申しますと、林がすべて榆の木からなっているのでこの名が付いたのです。秦王はただ一騎で林の中に駆け込んで隠れました）」とあるのに一致する。○齊臻臻……きちんと並んでいる様。多く兵卒・臣下・軍隊などが居並ぶさまを形容する。元刊本「趙氏孤兒」第三折【新水令】

「齊臻臻擺着士卒、明晃晃列着鎗刀（ずらりと兵士を並べ、きらきらと刀槍を列ねる）」など。ここでは木が並ぶ様。

【訳】戦馬を鞭打ってパカパカと電光の如くに駆けらせ、味方の兵どもを構っている余裕もあらばこそ、谷川を越え坂に沿って道を探して大慌て。乱れ茂るいばら、密に並ぶ榆柳の木がずらりと長く列を作るところを駆けすぎる。

【么】是他氣撲又（撲）荒（慌）攢入里面藏。眼見的 一身亡。將弓箭忙拈胡底（抵）當。呀く（呀）寶雕弓拽滿、味く（味）些（紫）金鉞連發、火く（火）都閃在兩邊相（廂）。

【校】○攢……鄭本は「鑽」に改める。○底當……鄭・徐・寧は「抵當」に改める。○呀く……徐本は「呀呀呀」に改める。○味く……徐本は「味味」に改める。○些……鄭・徐・寧本は「紫」に改める。○火く……徐本は「火火火」に改める。○相……隋本・鄭本・徐本・寧本は「廂」に改める。

【注】○是……「雖」に同じ。元刊本「博望燒屯」第一折【金盞兒】「這個是義子有心機。這個須降將顯忠直（こちらは養子とはいえ思慮があり、こちらは降将とはいえ忠義を示す）」とあるように、やはり「雖」の意味である「須」と対になり、同じ意味で用いられている（『詩詞曲語辭匯釋』「是（一）」。○氣撲撲……憤るさま、興奮するさまを形容する語。「氣不丕」「氣勃勃」なども表記する。『董西廂』卷一【繡帶兒尾】「氣撲撲走得掇肩的喘（ブンブンと駆けつけて肩で息する）」、「忍字記」（息機子本）第四折【么篇】「我這裡便忍不住、氣撲撲向前去將他扯攞（わ

しの方では我慢なりかね、ブンブンと進み出て奴をひつつかまえる」。ただしここでは追いつめられている状態なので、怒りが主になつてはおかしい。興奮して息を切らせる様子か。○攢……「鑽」に同じ。錐などで穴を明ける、またそのようにして何かの中に入り込むこと。元刊本「看錢奴」第二折「滾繡毬」「做娘的剌心似痛殺《殺》刀攢腹（母たる身は心えぐられる如くすぎずきと刀で腹を突かれるよう）」ほか。○眼見の……必ずやるとなるう。「みすみす」というニュアンスを帯びる。元刊本「趙元遇上皇」第一折「遊四門」「下目（目下）申文書難回向、眼見の一身亡（いま文書を届けて返事を届けることが難しければ、必ずやむざむざ命を落とすこととなるう）。○將弓箭忙撚胡底（抵）當……『大唐秦王詞話』第三十六回に李世民が敵將燕義を射殺することが見える。「單鞭奪槊」第三折では、正末（唐元帥）が「我手中有弓可無箭。兀那單雄信、你知我擅能神射（手には弓はあれども矢がない。おい單雄信、わしが弓術に長けていることは知っておろう）」と言うが單雄信に見透かされてしまうことになっている。○紫金鉞……赤銅の鏃の矢。「鉞」は幅広で薄い鏃を付けた矢のこと。この部分は類型化した表現らしく、「飛刀對箭」第三折高麗將の白にも、「白袍將搭上紫金鉞（白衣の將は赤銅の鏃の矢をつがえ）」というのを受けて、正末が「白袍將見箭不中、咪咪連射三枝神箭（白衣の將は矢あたらはずと見て取るや、ヒュンヒュンヒュンと立て続けに三筋の矢を放つ）」と言う場面がある。○火火……ひらひら。通常は旗が風に揺れる擬音。元刊本「氣英布」第四折「刮地風」「火火古刺刺兩面旗舒」（本折「么」の注参照）。ここでは矢が落ちる音であろう。

〔訳〕（秦王は）息を切らして榆柳の林に身を隠したが、命は風前の燈。弓矢を手にとり、むやみに抵抗しようとする。ヤヤッ、象眼施した弓をいっぱい引いて、シュッシュッと矢を続けざまに射れば、パッパッと兩側に矢を払い落とす。

【金盞兒】却是那些兒荒（慌）。那些忙。「帶云」忙不忙、元帥也記得。

〔唱〕把一領錦征袍扯裸得沒頭當。單雄信先地趕上△手撚着六沈槍。く

〔槍〕尖兒看看（看）地着脊背、又（着脊背）透過胸堂（膛）。那時若

不是胡敬德、陛下聖鑑誰答（搭）救小秦王。

〔校〕○荒……隋・鄭・徐・寧本は「慌」に改める。○六……鄭・徐・

寧本は「緑」に改める。○又……隋本は「脊背」、鄭・徐・寧本は「着脊背」とする。○答救……隋・鄭・徐・寧本は「搭救」に改める。

〔注〕○那些兒……「どれほどか」。感嘆の口調を示す。『董西廂』卷

一「牆頭花」「雖爲箇侍婢、舉止皆奇妙。那些兒鶻鶻那些兒掉（女中と

は申せ、ふるまいはみな見事。げにも賢げに、げにも美しい）。○「帶

云」「唱」……「帶」はうたの間に挿入される入れぜりふのこと。これ

らのト書き、特に前者が明記されているは元刊本では珍しい。○「不

……」「するのしないのつて」。強調。○扯裸……徐校は「裸疑當作擲

（裸）は「擲」とすべきではないかと思われる」と述べる。「擲袖擲

拳」は元曲において頻用される言葉であるが、「東堂老」（内府本）第四

折「沈醉東風」に「你那裡裸袖擲拳無事眼（お前の方では腕まくりし拳

をあげてわけもなく猛々しいさま）」など「裸袖」にする例も多く、明

代になると『三国志演義』（嘉靖本）「司馬師廢主立君」に「玄掙拳裸袖、



徑打司馬師（夏侯玄は拳をあげ腕まくりすると、まっしぐらに司馬師めがけて殴りかかりました）」とあるように、「裸袖」がむしろ一般的になり、「裸臂」「裸手」などのバリエーションも生じる。おそらく腕をまくる＝腕をむき出しにするという連想から、この表記が一般化したものであるう。ここは「裸」とする早い事例ということになるかもしれない。ここで述べられているのは、おそらく李世民を追う單雄信を徐茂公（功）が追って、昔義兄弟の契りを結んだことに免じて見逃してくれと袖をつかんで頼んだのに対し、單雄信が袖を切り離し、徐茂公との義を断つという、「單雄信割袍斷義」として知られる有名な場面であろう。「單鞭奪槊」（古名家本）第三折「茂公蹕馬慌上」兀的不是元帥。「做揪雄信科」

「茂」將軍且暫住一住。……「雄」徐茂公、你放手。往日咱兩個是朋友、今日各霸其主也。「茂」將軍、看俺舊交之情咱。「雄」兩次三番則管里扯住。罷。我拔劍來。你見么。我割袍斷義（徐茂公馬に乗りあわてて登場）元帥様ではないか。「單雄信を引き留めるしぐさ」「徐茂公」將軍、しばしお待ちを。……「單雄信」徐茂公、放せ。昔は我らは友であったが、今はそれぞれ主人を王者たらしめんとしておるのじゃ。「徐茂公」將軍、昔のよしみを思ってください。「單雄信」何度もむやみに引き留めおる。ええいままよ。劍を抜くとしよう。見よ、上着を斬って義を断つたぞ。「大唐秦王詞話」第二十七回などにも同様の場面がある。○没頭當……つかみどころがないこと。「朱子語類」卷六十七「易三」「莊子説話雖無頭當、然極精巧、説得到（莊子の言葉はつかみどころがないが、しかし非常によくできておって、うまく言っている）」。○六沈槍……元來は杜甫の「重過何氏」五首之四に「兩拋金鎖甲、苔臥綠沈槍（雨の中

に金の鎖のよろいは投げ捨てられ、苔の中に濃い緑色の槍が横たわる）」と見えるのに基づくが、「單刀會」（脈望館抄本）第三折における關平の白に、「五方旗、六沈槍、遮天映日。七稍弓、八楞棒、打碎天靈（五方の旗と六沈の槍は天と日を覆い隠さんばかり。七稍の弓と八楞棒は、脳天を打ち砕く）」と数え歌の一環として用いられ、「老君堂」（内府本）第三折の李靖の白でも六づくしの中で「六沈槍」が見える点からして、白話文学の世界では「六沈槍」という表記が定着していたようである。

○胡敬德……尉遲敬德のこと。楊舜臣の【點絳脣】「慢馬」に「美良澗怎敵胡敬德。虎牢關難戰莽張飛（美良澗にて胡敬德の相手になれようはずもなく、虎牢關にて猛き張飛とは戦いがたい）」とあり、『大唐秦王詞話』第二十三回の回目が目録では（本文は異なる）「六丁神暗傳戰策胡敬德明奪先鋒」であるなど、白話文学の世界では広く見られる言い方であるが、正統的な文献には例がない。彼の出身地が朔州善陽（山西省朔縣）という胡地であるからだともいうが、あるいは「尉遲」が、元來は西域の于闐国王の姓であることに由来するのかもしれない。○小秦王……李世民のこと。演劇・芸能では、李世民は常に若者の姿でイメージされるのでこうした呼び名が付いたものであるう。後漢の光武帝を「小漢王」と呼ぶのと同様のことと思われる。『琵琶記』（陸貽典本）第九出「我好似小秦王三跳澗（まるで小秦王の三人ながらに谷川を飛び越した時のよう）」。

「詠」元帥はどんなに慌て、どんなに焦られたことか。（いれざりふ）慌てたの慌てないのといったら。元帥も覚えておられましよう。「唱」（徐茂公が）單雄信の錦の征袍をひっぱって止めても取りつく島なく、單雄

信はまず追いつき、手に六沈の槍を握りました。そのきつききみるみる背中に届こうとし、届いて胸を貫こうとしたそのとき、かの胡敬徳がいなければ、陛下、ご明察を。誰が小秦王を救えたでしょうか。

【醉扶歸】索甚把自己千般獎。齊王呵不如交別人道一聲強。若共胡敬徳草く(草)的鞭鬪槍。分明立了執結并文状。則他家自賣弄伶俐半响。把一條虎眼鞭直攬頭直上。

〔校〕なし

〔注〕○索甚……するにはおよびぬ。元刊本「陳搏高臥」第二折【隔尾】「放着這高山流水爲澶(檀)信。索甚野草閑花作近隣(この高山流水が信徒となつてくれよう上は、野の草やあだ花のような世間の輩と隣合うには及ばぬ)」。○草草……いいかげん。元刊本「老生兒」第二折【倘秀才】「有錢時待朋友花花草草(金のある時は友達をいい加減に扱つて)」。○執結文状……吏牘語。将来起こりうる問題に対して、当事者が書く保証書を「執結文状」といい、お上が書く保証書を「結罪文状」という。○虎眼鞭……尉遲敬徳の鞭(普通の鞭ではなく、鞭の形状をかたどつた武器)のことを言うようであるが、一般に鞭をさす言葉かどうかは定かでない。『西遊記』雜劇第五出「詔饒西行」尉遲恭云「虎眼鞭磨動紫煙、龍鱗劍出倚青天(虎眼鞭ふるえば紫煙動き、龍鱗劍抜けば天にも届かばかり)」。〔訳〕自分を褒めたたえるには及ばぬ。齊王よ、ほかの人から「たいしたもの」といわれるようにしておきなされ。もし敬徳といいかげんな氣持で鞭對槍の闘いするのなら、はっきりと保証書を立てるがよろしかる

う。ただ奴がしばし自分のさかしらをひけらかしているうちに、虎眼鞭の直撃を頭にくらうことになるだろう。

【尾(賺煞)】這廝則除了鐵天靈、銅鉢(脖)項。銅腦袋石鐫就的脊梁。那鞭上常有半紙血糊塗的人腦漿。則那鞭則是鐵頭中取命的閻王。若論高強。鞭着處便不死十分地也帶重傷。也是青天會對當。故交這尉遲恭磨障(磨障)這弒君殺父的劣心腸。〔下〕

〔校〕○尾……鄭・寧本は「賺煞」に改める。

〔注〕○【尾】……句格からいうと【賺煞】。ただし元刊本では、套数の最後の曲は【尾】と呼ぶのが一般的である。○鐵天靈・銅脖項・銅腦袋・石鐫就的脊梁・鐵頭……『白兔記』(汲古閣本)第四齣「奉請東方五千五百五十五個大金剛、都是銅頭銅腦銅牙銅齒銅將軍、都到廟裏吃福雞福雞、天尊。(内介)道人、不見下降。自古東方不養西方養。奉請西方五千五百五十五箇大金剛、都是鐵頭鐵腦鐵牙鐵齒鐵將軍、都到廟裏吃福雞嚼福雞(お招きいたしまするは東方の五千五百五十五人の大金剛、いずれも銅の頭、銅の腦、銅の牙、銅の齒の銅將軍、みな廟に来て福雞を食べられよ、天尊さま。(樂屋から)「このト書きは誤りか)道人、神様が下りてこられぬ。昔から東方が召し上がらねば西方が召し上がるとやら。お招きいたしまするは西方の五千五百五十五人の大金剛、みな鉄の頭、鉄の腦、鉄の牙、鉄の齒の鉄將軍、みな廟に来て福雞を食べられよ)」。つまり、金剛の描写ということになる。○半紙……「半指」との同音による誤りであろう。指半分くらい。べつとりと。元刊本「紫雲庭」第一折【天下樂】「滿臉兒半指霜(顔中霜がたっぷり)」。○對當……元

来は対応すること。また答えること。『朱子語類』卷四十「若以次對當、於子路對後便問他（順番に答えていくなら、子路の次に彼にたずねるべきだ）」、「傷梅香」第三折【青山口】「你便有口呵怎對當（あんたは口があらうと答えられまい）」。転じて処理するという意味になる。「玉壺春」第二折【牧羊關】「多管是人遭遇、料應來天對當（おそらく人の運命は、天の定めるもの）」。

〔訳〕こやつは鉄の頭・銅の首・銅の脳天・石でできた背中できていたのでなくてはかなうまい。あの鞭にはいつもべつとりと血と混じり合った脳漿がついておる。あの鞭こそは金剛の鉄の頭からでも命を取るといふ閻魔大王。武芸の手並みを言うならば、鞭が当たれば、たとえ死なずとも十分に深手を負うだろう。これもきつと天が用意されたものじゃ。ことさらに尉遲恭に、この主君を弑し父を殺す邪悪な心の妨げをなそうとされたのでございましょう。（退場）

## 《第二折》

〔末扮上了〕

〔校〕○末扮上了……徐本は「正末扮秦叔寶上了唱」に、隋・寧本は「末扮秦叔寶上」に改める。

〔注〕○末……本折の正末は秦叔寶と思われる。秦叔寶は尉遲敬徳と並称される勇将。『舊唐書』卷六十八「秦叔寶名瓊、齊州歷城人。……又從征於美良川、破尉遲敬徳、功最居多（秦叔寶、諱は瓊、齊州歷城の人である。……更に美良川の戦いに参加し、尉遲敬徳を破つて

一番手柄を立てた)」。元雜劇においては、「單鞭奪槊」（古名家本）楔子の尉遲敬徳の白に「今因唐元帥領兵前來與我相持、在美良川交鋒。某與唐將秦叔寶交戰百餘合、不分勝敗（唐元帥が軍を率いて攻めてきたゆえ、美良川にて合戦いたしました。それがしは唐將秦叔寶と百合あまり戦いました。勝負が付きませぬ）」とあるように、美良川における秦叔寶と尉遲敬徳の戦いがクライマックスとされるのは、すでに述べたとおりである。明代以降に刊行された『隋史遺文』『隋唐演義』『說唐全傳』などの小説は、いずれも秦叔寶を主人公とする。この折の曲文の半ばほどは、明の嘉靖年間、郭勛により編纂され、内府などから刊行された曲選『雍熙樂府』卷九に「叔寶不伏老」と題して収められるものと一致する。そして、後にふれるように本折の曲文は他の部分と整合性を欠く要素を多く含んでおり、元来「三奪槊」の一部として制作されたものかについては大きな疑問がある。他方、『雍熙樂府』に先行して成立した曲選『盛世新聲』には、『雍熙樂府』にない部分が含まれている。以下『雍熙樂府』は「雍本」、『盛世新聲』は「盛本」として、紙数の都合上、特に重要なもののみ校勘記に含めることにする。

《南呂》【一枝花】箭空攢白鳳翎、弓閑掛烏龍角。土培損金鎖甲、塵味了錦征袍。空喂得那疋戰馬咆哮。皮楞簡生疎却。那些兒俺心越焦。我往常雄糾糾（糾）的陣面上相持、惡暗暗（暗）的沙場上戰討。

〔校〕○皮楞簡……盛本は「擊楞簡」、徐本は雍本に従い「劈楞簡」、隋・寧本は「劈楞鏑」とする。○我往常雄糾糾的陣面上相持……この句、雍本は「多不到五七載其高」とする。

〔注〕○金鎖甲……第一折【金盞兒】「六沈槍」注を参照。○皮楞簡……

武器。小説では「劈楞鏢」と表記される。鞭に似るが、断面が四角い。

「楞」というのはそれに由来するものか。簡もしくは鏢は武芸十八般の一つに数えられる一般的な武器だが、特に秦叔寶の得物として名高い。

『大唐秦王詞話』第二十六回「叔寶閑向書齋靜坐、……壁上掛着一對劈楞鏢、猛然咭叮當響亮一聲（秦叔寶が書齋で所在なくすわつておりますと、……壁に掛けてあつた一對の劈楞鏢が、突然ガチンと大きな音を立てました）」。○生疎……疎遠。無沙汰。柳永【少年遊】「狎興生疎、酒徒蕭索、不似去年時（いぢやいぢやすることともすつかりご無沙汰、酒飲みのこのさびしい思い、去年とは大違い）」。『西廂記』卷五第一折（弘治本）【後庭花】「他怎肯冷落了詩中意、我則怕生疎了絃上手（あの方が詩に込めた思いを捨て置くはずはないけれど、琴の絃をつま弾くこととご無沙汰なさることが心配で）」などの用例があり、特に女性や酒と縁遠くなることを言う時に、「冷落」とペアで多く用いられる。○惡暗暗……猛々しいさま。元刊本「單刀會」第二折【叨叨令】「他惡暗暗（暗）揜起征袍袖（猛々しくひたたれの袖まくりあげ）」など。

〔訳〕矢に白鳳の羽根集めるも空しきこと、烏龍の角の弓掛けるもあだなこと。金鎖の鎧は土を被つて腐りかけ、錦の陣羽織は塵が積もつて埃だらけ。かのおたけびあげる軍馬に飼葉をやるも空しきこと、劈楞鏢ともご無沙汰になつてしもうた。なんともますます気持は焦るばかり。昔は勇ましく陣にて合戦し、猛々しく戦場でいくさをしたものなのに。

【梁州】這些時但做夢早和敵軍對壘、才合眼早不刺く（刺）地戰馬相交。

則聽的韻悠又（悠）的耳畔吹寒角。一回價不響く（響）的催軍鼓播、嚮

（響）當又（當）的助戰鑼敲。稀撒又（撒）地《朱》簾篩日、滴溜く（溜）

的繡幙番（翻）風、只疑是古刺又（刺）雜綵旗搖。那的是急煎く（煎）

心癢難揉（揉）。往常則許咱遇水疊橋。除了咱逢山開道。海（嗨）如今央別人跨海征遼。壯懷、怎消。近新來病體兒直然覺（較）。我自暗約也枉了醫療。被這秋氣重金瘡越發作。好交我痛苦難消。

〔校〕○則聽的く助戰鑼敲……雍本はこの三句を欠く。「簾」を隋・鄭

寧本は盛本に従い「朱簾」、徐本は「珠簾」に改める。この句は四字句であり、「繡幕翩翩」と対になる以上、「簾」の前に一字抜けていること

は明らかである。「珠簾」は真珠のすだれを言い、閨怨の作で用いられることが多い。「朱簾」も同様に用いられる語彙ではあるが、後の軍旗に見まがうというところから考えると、赤い布でできたカーテン状のものである方が適切と思われる。盛本と一致する点から考えても、「朱」

を補うのが妥当であろう。○心癢難揉……隋・鄭・徐・寧本は盛本・雍本に従つて「心癢難揉」とする。○覺……隋・鄭・徐・寧本は、雍本に従つて「覺」を「較」に改める。

〔注〕○這些時……近頃、このごろ。元刊本「拜月亭」第三折【尾】「我這些時眼跳腮紅耳輪熱。眼夢交雜不寧貼（私は最近まぶたがびくつき、頬は赤く、耳たぶは熱く、夢ばかり見て落ち着かない）」など。○對壘……對戰する。『董西廂』卷二【伊州袞纏令】白「使刀的對壘、使槍的好闘（刀の使い手は對抗しようとし、槍の使い手は闘志がやまぬ）」。

○寒角……寒々とした角笛の音。白居易「晚望」「江城寒角動、沙州夕鳥還（川のほとりの町に寒々と角笛が響き、中洲に夕鳥が帰る）」。

○一

回價……しばらく。短い時間を言う。「一會價」「一回家」「一會家」に同じ。「價」「家」は語助詞。○雜綵旗……色とりどりの軍旗。『董西廂』卷二【玉翼蟬】「衆軍聞言、鑿鑿播戰鼓、滴流流地雜彩旗搖（軍勢この言葉を聞き、ドンドンと陣太鼓を打ち、ハタハタと色とりどりの旗を振る）」、元刊本「博望燒屯」第二折【一枝花】「遮天雜綵旗、振地花腔鼓（天を覆う色とりどりの軍旗、地をどよもす模様のある太鼓）」。○那的是……「何がゝか」という反語の場合と、「それこそがゝだ」という意味の場合とがある。後者の例としては、元刊本「介子推」第三折【普天樂】「兀的是還（追の誤り？）你魂的高車駟馬。「云了」那的是取你命的大纛高牙（それはお前の魂を奪う立派な馬車、（セリフを受けて）それはお前の命を取る軍旗）」と、「兀的」と併用されているものがある。こゝも同様であろう。○心癢難揉……もどかしくてたまらない。元刊本「魔合羅」第二折【刮地風】「眼盼又（盼望）的妻兒音信查。急煎又心癢難揉。慢騰又行出靈神廟（妻の便りをひたすら待ちわび、いらいらともどかしく、のろのろと靈神廟を出る）」ほか。○遇水疊橋・逢山開路……先鋒が道を切り開きながら進軍するさま。「衣襖車」第二折【烏夜啼】「也不用排軍校。你端的逢山開道。遇水疊橋（兵を並べる要もないか。おぬしはまことに山に逢うては道を開き、川に出会えば橋を架けると申すもの）」ほか。○如今央別人跨海征遼……この句は、本劇の状況と一致しない。元刊本「薛仁貴」楔子の白に「目今聽知國家跨海征遼（今お国が海を渡つて遼を伐とうとしておられるとのことにて）」というように、「征遼」というのは唐王朝成立後、太宗の治世に尉遲敬徳・薛仁貴らが高句麗を討つた時のこと（史実では貞觀二十年（六四六））であり、今問題

になっている事件からは三十年近く後のことになる。太宗の高句麗遠征は、雜劇「薛仁貴」のほか、『永樂大典』所収の『薛仁貴征遼事略』など、白話文学の世界ではよく知られた事件であり、この時尉遲敬徳が老齡の身で出陣することを題材とした南曲『金貂記』も人気のある芝居である。しかも「三奪槩」の時点では秦叔寶はまだ壮年であり、本折の状況に合わない。一方で『雍熙樂府』における「叔寶不伏老」という題は曲文と合致し、また高句麗遠征を扱った楊梓の雜劇「敬徳不伏老」の題名と対をなしている点から考えても、征遼の時、病身で残された秦叔寶の悲しみをうたうものとすれば、すべて辻褃が合うことになる。この点から考えて、本折は別の雜劇、もしくは「叔寶不伏老」と題する散曲を流用したものである可能性が高いものと思われる。○直然……「緋衣夢」（顧曲齋本）第一折【賺煞】「你可也莫因循、早些兒休遲慢。天色兒直然交晚（ぐずぐずするな、早くしてのろのろするな、もう日が暮れますよ）」とこの例があるのみ。しかも「緋衣夢」の内府本にあたる「四春園」（同じ芝居だが題が異なる）では「眞然」と記されているように見える。「緋衣夢」の例からは「もう」または「まもなく」というように見えるが、むしろ強調の言葉であって、「本当にもう暮れようとしている」という方向なのではあるまいか。「三奪槩」のこの事例も次の「覺」を強調しているのではないかと思われる。○覺……「較」に同じ。癒える。「拜月亭」第三折【尾】「您哥哥暑濕風寒從（縱）較些（あなたのお兄様は風邪の具合がすこしよくなられたにしても）」など。○秋氣・金瘡……「金瘡」は武器により受けた傷。唐の盧綸「逢病軍人」に「蓬鬢哀吟古城下、不堪秋氣入金瘡（くしゃくしゃ頭で古い城壁の下に悲しく

吟ずれば、秋の氣が傷に入ってくるのはたまらない」とあり、おそらくこれを受けて元の楊果の「羽林行」（『國朝文類』卷四）に「秋風秋氣傷金瘡（秋風秋氣が金瘡をいためる）」という句が見える。

〔訳〕この頃では夢を見さえすればはや敵軍と向かい合い、目を閉じさえすればはやパカパカと戦馬がかけちがう。聞こえるはブオーブオーと耳もとに響く角笛の音。やがてドンドンと攻め太鼓を打ち、ジャンジャンといくさ励ます銅鑼を鳴らす。朱の簾にチラチラと日が差し込み、刺繍したカーテンがヒラヒラと風に舞えば、色とりどりの軍旗ハタハタと打ち振るのかと思ってしまう。ほんにイライラともどかしくてたまらぬわい。昔はわしばかりを先鋒に任せられて川に出くわせば橋を架け、わしばかりが山に出会えば道を切り開いたものを、ああ、今では別の者に海を渡つて遼を攻めよとのお申し付け。はやる思いをどうして消せよう。近ごろ病はすっかりよくなってきたようではあるが、思うに治療したとてむだなこと。秋の冷気で昔の切り傷がまた痛みだし、なんともこの苦しきは消し難い。

【賀新郎】我欠起這病身駢（軀）出戸急相邀。你知我迭不的相迎、不沙賊丑生你也合早些兒通報。見齊王元吉都來到。半晌不迭手脚。我強く（強）地曲脊低腰。怪日（早）來喜蛛兒的溜く（溜）在簷外垂、靈鷲兒咋く（咋）地頭直上噪。昨夜个銀臺上剥地燈花爆。它兩個是九重天上皇太子、來探俺這半殘不病舊臣僚。

〔校〕○【賀新郎】……この曲は盛本・雍本にはない。先の推定のように元来高句麗遠征の時のうたであったとすれば、すでに死んでいる元吉

が登場するはずはなく、この曲はおそらく「三奪槊」の物語に合わせるために挿入されたものであろう。ここで建成と元吉が秦叔寶を訪ねるものと思われるが、李世民側の重要人物である秦叔寶を彼らが訪問し、それを受けて秦叔寶が喜ぶというのは不自然である。第二折において、証人を訪ねて敵対者（後半の正末）の威力を知るといふのは、「單刀會」などに見られるパターンであり、ここではそれに合わせるため強引にこの場面を設けたのであろう。○身駢……隋本・鄭本・徐本・寧本は「身軀」に改める。○不沙、賊丑生……徐本・寧本はこの二句を、鄭本は「賊丑生」のみを帶白とする。○日來……徐本・寧本は「早來」に改める。原本も「日」の下部と「來（来）」に近い俗字体」の上部が接続しており、「元来「早來」だったものが「日來」と見えるだけなのかもしれない。ただし「日來」も「この頃」という意味で用いられることがあり、「日來」である可能性も絶無ではない。

〔注〕○欠起……「欠身」（相手に対する敬意を示すため腰を浮かせること）すべく起きあがることであらう。○迭不的……「迭」は及ぶ。「迭不得（的）」で間に合わないという意味になる。元刊本「追韓信」第三折【鬪鶴鷄】「臣迭不得舞蹈揚塵（それがし舞蹈揚塵の礼を行ういとまはございませぬ）。『老乞大』上「主人家、迭不得時、咱每伴當裏頭教一箇自爨肉（ご主人、間に合わないようなら、私たちの仲間の中から一人に肉を炒めさせますから）。○不沙……通常は、「不刺」などと同様に意味のない襯字などに用いられる言葉とされる。鄭本はこの語を前の句に付けて、おそらく特に意味のない語尾に付く言葉として扱っているものと思われるのに対し、徐本・寧本は後の「賊丑生」とあわせて帶

白とする。これは『詩詞曲語辭匯釋』「不刺」の項における「僕を叱る言葉……特に意味はない」という説明に基づくものであろう。どちらが正しいかは定めがたい。ここでは仮に後者に従っておく。○喜蛛兒・靈鵲兒・燈花……蜘蛛が垂れてくること、鵲が鳴き騒ぐこと、灯火がはざること。いずれも待ち人が来る前兆とされる。『西廂記』（弘治本）卷五第二折【迎仙客】「疑怪這噪花枝靈鵲兒。垂簾幕喜蛛兒。正應着短檠上夜來燈報時（この花咲く枝に騒ぐ鵲と、カーテンに垂れる蜘蛛が、燭台にはざるともしびの知らせに應じるものかと疑いおれば〔他のテキストは「燈報」を「燈爆」とする。〕」など。○剥地……ともしびのはざる音。「漢宮秋」（古名家本）第一折【油葫蘆】「今宵晝燭銀臺下。剥地管喜信爆燈花（今宵ともしびともる銀の燭台の下、パチンとめでたい知らせのはざる音）。○半殘不病……殘病に同じ。病氣もち。「半く不……」は、「半殘不落（抜けそうだがまだ抜けていない）」「半殘不濟（ひどくなくて）どうしようもない」など、「くでもなければ……でもない」もしくは「かなりくで……でない」という意味になるのが普通だが、この場合「不」に否定の意味はない。○皇太子……白話文学においては、正式の皇太子以外の皇子をも太子と呼ぶことが多い。元刊本「介子推」第一折【混江龍】「大太子申生軟弱、小太子重耳囊揣（上の太子の申生は軟弱、下の太子の重耳はふがいない）」。

が、無理やり背を曲げ腰をかがめてご挨拶。道理で朝っぱらから蜘蛛が軒先にスルスルと垂れ下がってきたり、カササギが頭上でギアーギアー啼いたり、昨夜は銀の燭台にパチパチともしびがはぜたわけだ。彼らお二人は宮中大奥の皇太子さま、よくもこんなわたしのような病もちの旧臣をおたずねくださったものだ。

【牧羊關】這些淹潛病、都是俺業上遭。也是俺殺人多一還一報。折倒的黃甘又（甘）的容顏、白絲又（絲）地鬢脚。展不開猿猱臂、稱（撐）不起虎狼腰。好羞見程咬金知心友、蔚（尉）遲恭老故交。

【校】○雍本にはこの曲なし。○淹潛病……鄭本は盛本に従って「淹漸病」、徐・寧本「腌臢病」に改める。○稱不起……隋・鄭本「撐不起」。盛本は「伸不起」に改める。

【注】

○淹潛病……通常は「腌臢病」と表記する。「腌臢」は汚い、ろくでもないといった意味。『董西廂』卷五【刮地風】「自家這一場腌臢病、病得來蹠蹠（私のこのろくでもない病氣は、おかしな症状）。○一還一報……因果応報で報いが来ること。元刊本「鐵拐李」第一折【賺煞尾】「不是我千錯萬錯。大剛來一還一報（あまたのしくじりしたわけでもないのに、これはとんだ因果応報じゃ）。○黃甘甘……『說唐全傳』第四十六回で尉遲敬徳が「待這黃臉的賊來（この黄色い顔の悪党が来たら）」と言うように、後世の白話文学の世界における秦叔寶の特徴は顔が黄色いことである。○折倒……苦しめる、いじめる、（他人のせい）健康を損なう。『董西廂』卷一【攪箏琶】「都因爲那薄倖種、折倒得不戲（あの薄情

者のせいで、すっかりやつれ果ててしまった」。○稱……肩や腰を動かすことのようにあるが、「撐」と通じるとすると、腰なら伸ばす、肩ならそびやかすといった方向性を持つものと思われる。元刊本「趙氏孤兒」第四折【耍孩兒】「稱動馬熊■（腰）將猿臂輕舒（ヒグマの如き腰をのばし、猿の如き腕をさしのべ）」、『西廂記』（弘治本）卷二第四折【折桂令】「我這裏手難擡稱不起肩窩（私はといえれば手も持ち上げがたく、肩も動かせず）」○虎狼腰……『三國志演義』（嘉靖本）「曹操起兵伐董卓」における華雄の描写に「虎體狼腰、豹頭猿臂」とある。○程咬金……『舊唐書』卷六十八「程知節傳」に「程知節、本名饒金、濟州東阿人也」とあるように、史書では程知節とされるが、白話文学の世界では程咬金の名で知られる。終始秦叔寶と行動をともした武将だが、『説唐』などの物語においてはもと山賊、無学文盲、大変ないたずら者だが一種の聖性を帯びたトリックスターとして活躍し、事実上の主人公といっても過言ではなく、庶民の代表者として中国民衆の間で絶大な人気を誇る。○老故交……尉遲敬徳も老齡であることを示唆する。やはり高句麗遠征の物語であることを示しているよう。

〔訳〕このろくでもない病は、すべて我が業のなせるもの、やはり多くの人を殺した報いであろう。病に犯されて顔は黄色く、鬢は真っ白。猿のような腕は伸ばせず、虎狼のような腰は動かせない。親友の程咬金や昔なじみの尉遲恭に会わせる顔がない。

【隔尾】我從二十三上早駟軍校。經到四五千場惡戰討。怎想頭直上輪還老來到。我暗約。慢ヌ（慢）的想度。海（嗨）刮馬似三十年過去了。

〔校〕○雍本にこの曲なし。○二十三……徐本は盛本に従って「二十一」と改める。○刮馬……寧本は「過馬」に改める。盛本は「跑馬」。

〔注〕○盛本が「二十一」とするのは誤刻であろう。「二十三」「四五」と、「三三四五」の数あわせになっているものと思われる。○輪還……「輪環」に通じるか。文言には「輪還」の用例がなく、元曲には「輪環」の用例がない点から見て、表記に棲み分けがあるようである。「王粲登樓」（何焯抄録李開先抄本）第一折【公篇】「也須有箇天數循環。輪還我不平奮氣空長歎（運命のめぐる時もあるもの。今は不平の思いつるわせ空しくため息つく定め）」、貫雲石【醉高歌過紅繡鞋】「四時天氣尚輪還（四季の気候もまためぐる）」。○頭直上輪還老來到……自分の頭上に老いがめぐってくる、つまり白髪になること。杜牧「送隱者一絶」詩「公道世間唯白髮、貴人頭上不曾饒（世の中で公平なのは白髪だけ、貴人の頭の上も勘弁してはくれぬ）」が古くから知られ、『容齋隨筆』卷十一「唐詩戲語」などにも見える。○刮馬……馬を走らせること。「梧桐葉」第二折【伴讀書】「刮馬兒也似回頭不知處（風に吹かれた葉が）駆ける馬のように通り過ぎてどこにいったやら」。

〔訳〕二十三歳のときから兵を指揮し、四五千回もつらいいくさを重ねてきたが、自分の頭にも老いがめぐって来ようとは思ひもしなんだ。心の中にてゆるゆると思えば、奔馬の如くに三十年が過ぎてしまったのだな。

【牧羊關】當日我和胡敬徳兩個初相見、正在美良川廝撞着。咱兩個比並一个好弱低高。它滴溜着虎眼鞭。我吉丁地着脾（皮）劈簡架却。我得



空便也難相從、我兒破綻也怎擔饒。我不付能卒ヌ(卒)地兩揀(簡)才  
颯重(去)、它搜ヌ(搜)地三鞭却還報了。

〔校〕○牌笏簡……徐本は雍正本に從い「劈楞簡」、鄭本は本折「一枝花」  
に從い「皮楞簡」、隋・寧本は「劈楞簡」に改める。○難相從……徐・  
寧本は「難相縱」に改める。盛本は「難容放」、雍正本は「難躲閃」とす  
る。○兩揀才颯重……盛本が「揣ヒ的兩簡才丟去」とするのに従つて、  
隋・寧本は「兩簡才颯去」、徐本は「兩簡才颯去」に改める。鄭本は「兩  
簡才颯重」。雍正本は「搜搜兩簡方將中」とする。○搜ヌ地……徐本は「颯  
颯地」に改める。

〔注〕○比並……競う。元刊本「調風月」第三折【紫花兒序】「咱兩個  
堪爲比並(私たち二人はいい勝負)」。○好弱低高……腕の良し悪し。『董  
西廂』卷一【風吹荷葉】「誰曾慣對人唱他説他。好弱高低且按捺(人に  
向かつて唱い語るにも慣れてはおりませぬが、腕のよしあしはまずさて  
おき)」。○颯……打つこと。馬致遠【耍孩兒】套「借馬」【三】「休教鞭  
颯着馬眼(鞭で陰莖(?))を打つな」。○難相從……このままで考える  
と、「隙を見てもつけ込みかねる」という意味になる。「單鞭奪槩」(古  
名家本)第三折【聖藥王】「拈打璫鞭槩緊緊相從(ガチッと鞭と槩は離  
れることなく)」はこれに近い。徐・寧本に從つて「難相縱」と改め  
ると、「隙を見たらゆるしてはおかず」となる。ここでは仮に後者に從つ  
て訳す。○擔饒……許す。『董西廂』卷四【攪箏琶】「官人每更做擔饒你、  
須監收得你幾夜(殿様方はあなたを許してくれるにしても、何日間かは  
牢屋入りせざるにますまい)」。この句も、「私が隙を見せたら尉遲敬  
徳はどうして許しておこうか」と「私が隙を見つけても尉遲敬徳はどう

して好きにさせてくれようか」という二通りの解釈が可能である。ここ  
でも仮に後者に從つて訳す。○兩揀(簡)……三鞭……「三鞭換二簡」  
は、美良川の戦で起きた出来事として常に引かれるが、その内容はもの  
により異なる。両者の打ち合った回数だとする『説唐全傳』第四十六回  
が「那小説上却説三鞭換兩簡、是打背心的。……豈有此理(小説では「三  
鞭換兩簡」は背中を打つたのだと言っていますが、……そんな馬鹿な)」  
と言うように、どうやら原型はよろいを脱いだ体を互いに打ち合つて腕  
比べをするというものだったらしいが、あまりに不合理ゆえにそれぞれ  
合理化を図つた結果、内容にぶれが生じたらしい。いずれも秦叔寶が尉  
遲敬徳に勝るという点では共通するようである。

〔訳〕そのかみわしと胡敬徳二人が初めて出会つた時は、ちょうど美良  
川で出くわして、われら二人腕前を競つたものでした。やつは虎眼鞭を  
ビュッと振り下ろし、わしは劈楞簡でガチッと受け止めた。わしが相手  
の隙をみつけたら見逃すわけには行かぬ。わしが隙を見れば相手はど  
うしてそのまま許してくれようか。わしがようやくズズッと二振りきつ  
く打ち込んだと思えば、やつはサッサと三振り鞭でお返ししてきおると  
は。

〔隔尾〕那鞭却似一條玉莽(蟒)生鱗角。便是半截烏龍去了牙爪。那鞭  
着遠望了吸ヌ(吸)地腦門上跳。那鞭休道十分的正着。則若輕ヌ(輕)  
地抹着。敢交你睡夢里驚急列地怕道(到)曉。

〔校〕○盛本にこの曲なし。雍正本は【尾聲】とする。○一條玉莽生鱗角  
……隋・鄭・徐・寧本は「一條玉蟒生鱗角」に改める。雍正本は「那簡却

便似一條銀蟒除了鱗角」とする。○怕道曉……鄭・徐・寧本は「怕到曉」に改める。雍本はこの句が「便就是鐵臂銅頭也震碎了」となっている。

〔注〕○却似……さながらの如し。「恰似」に同じ。○一條玉蟒生鱗角……『桃花扇』第十三齣において丑（柳敬亭）が「秦叔寶見姑娘」という講釈をするくだりで、秦叔寶が鎧を使う場面を語って「使盡身法、左輪右舞、恰似玉蟒纏身、銀龍護體（技の限りを尽くし、左に回し右に舞わせ、さながら玉蟒の身にまつわり、銀龍の体を守るが如く）」とある。その他の白話文学作品においても、『大唐秦王詞話』第二十八回で「只見玉蟒銀蛇往下奔（目に入るのは玉蟒と銀蛇が下にかけるさま）」と秦叔寶の鎧を形容している。「玉」とは輝きを持った白い色のことであるから、銀色であるべき鎧にふさわしく、次句に言うように尉遲敬徳の鞭が黒いらしいことは矛盾する。雍本がこの句を秦叔寶の簡の形容とするのが元来の形なのであろう。ただし「生角鱗」は、元の歐陽玄の

「畊學問答」（『圭齋文集』卷四）に「畊者榮華得富豪、學者羽翼生鱗角」（農業に従事する者は榮華に重ねて富を得、學問に従事する者は羽が生えた上に鱗や角が生えるようなもの）とあるように定型化していた表現らしいが、元來鱗や角があるはずの玉蟒を鞭にたとえるのにこの言い回しを使うのは不自然である。○半截烏龍去牙爪……「博望燒屯」（内府本）第三折の張飛の白に「有如枯竹根三尺、恰似烏龍尾半截（三尺ある枯れた竹のよう、さながら烏龍の尾半分の如し）」とあり、これは張飛の鞭をさす。「單鞭奪槊」（古名家本）第四折にも徐茂公の白に「有如枯竹根三尺、渾似烏龍尾半截」とほぼ同じ表現があり、こちらは尉遲敬徳の鞭をさす。両者は、内府本の穿関では黒ずくめの服装という点で共通

しており、黒ということから「烏龍」という比喩が生じたものである。○驚急列地……あわてるさま。元刊本「竹葉舟」第四折【倘秀才】「見他戰篤速驚急列慌慌走着（見ればあいつはびくびくしながら大あわてで歩いている）」など。

〔訳〕かの鞭はまるで白いみずちが鱗や角を生やしたのにも似て（？）、半分の黒龍の牙や爪を取り去ったかのよう。かの鞭は遠くからシュッと脳天めがけて跳びかかる。かの鞭は真っ向から命中した時は言うに及ばず、もし軽くそつとかすただけでも、恐らくあなたを夢の中でびくびくと朝まで脅えさせるでしょう。

【鬪奄亨（鬪蝦蟆）】那將軍剗馬騎單鞭拈。論英雄半勇躍。它立下功勞。怎肯伏低做小。倚強壓弱不用呂望六韜。黃公三略。但征敵處躁抱（暴）相持處惟撇慄。那鞭若脊梁上抹着。忽地咽喉中血我（幾）道。來又來（來）來、它煩又（煩）惱く（惱）。焦又（焦）燥又（燥）。滴溜撲那鞭着。交你悠又（悠）地魄散魂消。你心自量度。匹頭上把他標寫在凌煙閣。論着雄心力、劣牙爪。今日也合消。又又（合消）封妻蔭子、祿重官高。

〔校〕○盛本にこの曲なし。雍本はこの曲以下すべてなし。○鬪奄亨……隋本は「鬪鶴鴉」、鄭・寧本は「鬪蝦蟆」、徐本は「鬪鴉兒」に改める。句格から考えて、「鬪蝦蟆」が妥当と思われる。○半勇躍……鄭本は「半踴躍」、徐本は「果勇躍」に改める。○躁抱……鄭・徐・寧本は「躁暴」に改める。○血我道……隋本は「血到。我道」、鄭本は「血冒。我道」、徐・寧本は「血幾道」に改める。原本の「我」は「幾」に字形が近く、「血幾道」が妥当と思われる。○又又……隋・鄭本は「我道來」、徐・

寧本が「來來」に改める。前が「血幾道」であれば、「來來」が妥当であろう。○焦又燥又……徐本は「焦焦躁躁」に改める。

〔注〕○剗馬……裸馬。白話文学の世界では、檢窠園の戦いにおいて、馬に水浴びさせていた尉遲敬徳が、上半身裸で裸馬に乗り、鞭一本のみで單雄信を退けたことになっている。「單鞭奪槊」(古名家本)第四折【煞尾】「施逞會剗馬單鞭(裸馬に鞭一振りの威力を發揮し)」。『大唐秦王詞話』第三十七回「說那敬徳精脊梁、蓬頭赤脚、人無衣甲、馬無鞍轡、……好敬徳、剗馬單鞭便走(さて敬徳は、背中もむき出し、ぼさぼさ頭に裸足で、人は衣も鎧もなく、馬には鞍も手綱もないという有様……あつぱれ敬徳、裸馬に乗り鞭一振りですまいます)」。○半勇躍……徐本は「果勇躍」に改める。確かに原本の「半」字は「果」字に多少近く見えるが、確かなことは言えない。ただし「半」では意味を取りがたいことは確か。○倚強壓弱……自分が強いのをいいことに弱い者をいじめめる。耶律楚材「請與公禪師開堂疏」五首之五「莫壓弱倚強」。○懨懨……猛々しいこと。また怒ること。『劉知遠諸宮調』卷十一【賀新郎】「洪信和洪義好驚燥。引兩個妻兒、盡總來到(李洪信と李洪義は、何とも粗暴な奴ら。二人の妻を引き連れてみんなでやってきた)」。『重西廂』卷八【黃鶯兒】「懨懨。懨懨。似此活得、也惹人恥笑(いまましい、いまましい。こんな風に生きていたところで、人の笑いものになるだけのこと)」。○匹頭上……「劈頭」に同じ。真っ先に。第一折冒頭の「正先」注参照。○凌煙閣……唐太宗が貞觀十七年に功臣の像を凌煙閣に畫いたことが最も有名。『大唐新語』卷十一「褒錫」、『舊唐書』等に見え、『新唐書』卷八九「秦瓊傳」には全員の名が記される。無論この段階で凌煙閣は存在しな

いわけだが、これは定型化した表現であつて、「介子推」「伍員吹簫」などの古い時代を扱った雜劇にもこの名称は見える。○劣……猛々しいこと。『武王伐紂平話』上「酒飲千鍾、會拽硬弓、能騎劣馬(酒を飲めば千杯、強弓を引くことができ、荒馬を乗りこなす)」。二音節化すると「劣缺」となる。『劉知遠諸宮調』卷二【木笪綏】「李洪義李洪信如狼虎。棘針棍倒上樹。曾想他劣缺名目(李洪義と李洪信は狼虎の如く、棘針棍と倒上樹(洪義と洪信の妻の名)は、粗暴な奴という評判など思いもしない)」。○

〔訳〕かの將軍は裸馬にまたがり、一振りの鞭をもち、げにもあつぱれな英雄ぶり(?)。手柄を建てているからには、卑屈な態度をとつたり、強きを持つて弱きを挫くようなことがあります。太公望の『六韜』や黄石公の『三略』もいらぬこと。敵を討つとなれば猛々しく、いくさとなれば荒々しく、かの鞭は背中に触れただけで、たちまち喉の奥から幾筋か血を吹き出す。さあさあ、彼が怒り、じりじりしておりますぞ。シュッとあの鞭にあたれば、あなたの魂ははるか遠くに消し飛んでしましましょう。よくお考えあれ、まっさきに彼は凌煙閣に描かれたのです。すぐれた志や猛き戦ぶりから言えば、いま妻は封じられ子孫は恩蔭を受け、俸禄重く官は高くなるのも当然のこと。

【哭皇天】交我忍不住微又(微)地笑。我迭不得把你慢又(慢)地交(教)。來日你若《見》那鐵幘頭紅抹額。烏油甲皂羅袍。敢交你就鞍心里驚倒。若是來日到御園中、忽地門旗開處、脫地戰馬相交。咬齊王呵這一番要把交。那鞭不比衝鋼槍槊、雙眸劍鑿。

〔校〕○交……隋・鄭・徐・寧本は「教」に改める。なお盛本は「交」。  
 ○你若……鄭・徐・寧本は「你若見」に改める。○若是來日到御園中……  
 徐・寧本は帶白とする。○把交……徐本は盛本に従って「把捉」とし、  
 隋本は「把教」として次の句にかけ、寧本は「爬交」に改める。○雙眸  
 ……鄭本は盛本に従って「雙鋒」、寧本は「霜毛」に改める。○盛本は  
 末二句を次の【烏夜啼】の冒頭二句とするが、鄭騫『北曲新譜』によれ  
 ば、【哭皇天】は【烏夜啼】と連用するのが普通であり、その場合【哭  
 皇天】の末二句を【烏夜啼】に冠することがあるという。

〔注〕○鐵幘頭・紅抹額・烏油甲・皂羅袍……幘頭は官吏などのかぶる  
 かぶりものだが、ここではその形を模した兜。日本の唐冠兜の類である  
 う。抹額は鉢巻き。武人と樂人が身につけるもの。通常かぶり物や兜の  
 上に目印として巻いたものようである。杜牧「上宣州高大夫書」「婁  
 侍中師德亦進士也。吐蕃強盛、為監察御史、以紅抹額應猛士詔（侍中の  
 婁師德も進士でした。吐蕃が勢い盛んでしたので、監察御史の身で、赤  
 い鉢巻きを付けて勇士募集の詔に応じました）」「小尉遲」（内府本）第  
 二折【醉春風】「我與你忙帶上鐵幘頭、緊拴了紅抹額（急ぎ鉄の幘頭を  
 急ぎかぶり、赤い鉢巻きをしっかと巻こう）。これらに烏油甲つまり黒  
 くつやのある鎧と、皂羅袍つまり黒い絹のひたたれという、鉢巻き以外  
 は黒づくめの服装は、尉遲敬徳の決まったスタイルである。「小尉遲」（内  
 府本）第一折正末の白に「你父親臨行時、留下一副披掛、在我行收着里。  
 是水磨鞭、鐵幘頭、烏油甲、皂羅袍（父上が行かれる時、残された武装  
 ひとつそろいを私がお預かりしております。水磨鞭、鐵幘頭、烏油甲、皂  
 羅袍でございます）」と言い、「敬徳不伏老」第三折【尾聲】に「綽見我

那鐵幘頭、紅抹額。烏油甲、皂羅袍（このわしの鉄幘頭、紅抹額。烏油  
 甲、皂羅袍をちらりとも見れば）とあるのはその例。なお『水滸傳』  
 第五十五回に見える呼延灼と孫立が、ともにほとんどこれと同じ武装を  
 していることは、前者が「雙鞭」、後者が「病尉遲」という綽号を持つ  
 ことと考え合わせると興味深い。○把交……伝える、言い残す。耶律楚  
 材「屏山居士『鳴道集』序」「屏山臨終出此書付敬鼎臣曰、此吾末後把  
 交之作也、子其祕之、當有賞音者（屏山は死ぬ前にこの書を出して敬鼎  
 臣に渡していった。「これはわしが最後に託する作じゃ。大事に隠して  
 おけ。理解できる者がいるはずじゃ）」。「鐵拐李」（元曲選本）第一折【賺  
 煞尾】「我今日爲頭便把交、爭奈在前事亂似牛毛（今日まず言い残そう  
 にも、これまでのことがあまりに滅茶苦茶じゃ）。盛本・徐本は「把捉」  
 とする。これは理解することであるが、「把交」の用例がある以上、改  
 める必要はあるまい。○雙眸劍擊……白仁甫「夜醉西樓爲楚英作」（『天  
 籟集』卷上）に「雙眸剪秋水、十指露春葱（二つの目は秋の水を切り、  
 十の指は春のネギが顔を出したよう）」とあるが、これは白居易の「箏」  
 に「雙眸剪秋水、十指剥春葱」とほとんど同じ表現を用いているのに基  
 づくものと思われる。同じ白居易の「李都尉古劍」には「湛然玉匣中、  
 秋水澄不流（玉の鞘の中にあふれんばかりの秋の水が澄んだまま流れず  
 にいる）」と劍を秋水に形容した事例があり、秋の水という共通点から  
 劍を美女の目にとえたものであろう。

〔訳〕こらえきれずにかすかに笑ってしもうた、ゆるゆると教えて差し  
 上げるいとまはありませぬが、明日あなたがかの鐵幘頭・紅抹額・烏油  
 甲・皂羅袍をみたら、きつと鞍の上でびっくりして倒れることでしょう。

(入れぜりふ) もしも明日御園に着いたなら、(唱う) さっと門の旗が開き、どつと軍馬が駆けちがうとなれば、ああ、齊王よ、今度ばかりはしかとお伝えせねばなりません。あの鞭は鋼の槍で突いたり、美女の瞳のように光る劍で突くのは訳が違いますぞ。

【烏夜啼】雖是沒傷損難貼金瘡藥。敢二十年青腫難消。若不去脊梁上敢向鼻凹里落。誠的怯又(怯) 喬又(喬)。難昼(畫) 難描。我則見的留的立不住腿脛搖。圪撲又(撲) 地把不住心頭跳。不如告休和、伏低弱。留得性命、落得軀殼。

【校】○脊梁上……徐・寧本「脊梁上颯」。○難昼難描……隋・鄭・徐・寧本「難畫難描」に改める。○的留的……徐本「的溜溜的」、寧本「溜溜溜溜的」。

【注】○鼻凹……顔面。『董西廂』卷二「玉翼蟬尾」「見和尚鼻凹上大刀落(和尚の顔めがけて大刀が落ちる)」。○難昼難描……「昼」は「畫」の誤り。通常は「絵にも描けない美しさ」という意味で用いる。王嘉甫【六么遍】「傾城傾國、難畫難描(傾城傾國の美女は絵にも描けない美しさ)」。ここで醜態の形容に用いているのは、皮肉な効果をねらったものか。○的留……滴溜に同じ。ゆらゆらしたさま。元刊本「霍光鬼諫」第二折【耍孩兒】「既君王聖怒難分辨(辯)。便是老性命滴溜在眼前(皇帝さまのお怒り言い逃れもなりがたいとあれば、この老いぼれの命も風前の灯火と申すもの)」。○休和……事件などをなかつたこととする。示談にする。『元典章』「吏部三 投下 投下職官公罪」「受錢私下休和(金を受け取ってこつそりなかつたことにした)」。

【訳】(かの鞭にやられれば) 外傷はなきことゆえ傷薬も貼れぬが、恐らく二十年は青あざが消えますまい。背骨の上でなければ、恐らく顔に落ちるでしょう。恐ろしさにびくびくと、絵にも描けぬその有様。見れば、ブルブルと足は震えて立っておられぬありさま。パクパクと押さえがたく心臓が飛び上がる。休戦和議を申し入れ、下手に出るのが一番じゃ。命を留め、身体を残すことができましよう。

【尾(煞尾)】可知道金風未動蟬先覺。那寶劍得來你怎消。不比君王行厮般調。侵着眉勞(稜)、際(擦) 着眼角。則若是輕又(輕) 的虎眼鞭末(抹) 着。穩情取你那天靈蓋半截不見了。【下】

【校】○尾……鄭・寧本「眉稜」に改める。○際着眼角……鄭・徐・寧本「擦着眼角」に改める。○鞭末着……鄭・徐・寧本「鞭抹着」に改める。

【注】○金風未動蟬先覺……元刊本「東窗事犯」第二折【二煞】「這話是金風未動蟬先覺、暗送無常死不知(これぞ秋風が吹き始める前に蟬はさとののに、ひそかに死が忍び寄っても人間は気づかないというもの)」。この成語は、『秦并六国平話』巻上で「張吉落馬。詩曰、金風未動蟬先覺、暗送無常總不知。張吉已死(張吉は落馬しました。詩に曰く、……張吉は死にました)」とあるように、全相平話では人が死ぬ場面で非常によく用いられる。ここでは上の句のみで下の句を暗示するという歇後語的な働きをしているものと思われる。○那寶劍得來你怎消……この直前に齊王が宝劍を賜ったという会話が交わされていたと考えられる。○君王……これを齊王とすれば、「あなたの前でおどすわけではないが、

鞭が肩にせまり、目をかすめ」という方向でも解釈は可能であるが、ここでは「君王」を高祖と取って訳しておく。○穩情取……必ずや。「澠池會」(内府本) 第三折正末云「主公放心。若到澠池會上、小官穩情取保得主公無事還國也(殿、ご安心あれ。澠池の会にまいりましたら、私が必ずや無事に国にお戻りいただけるようにいたします)」。

〔訳〕これぞ「死が密かに迫っているのに気づかず」だ。あの宝剣を手に入れてもどうして使いこなせよう。肩に顔を寄せ、目を擦りつけんばかりにして皇帝の前でそのかすようなことを言うのとは大違い。虎眼鞭がそつとかすっただけで、あなたの脳天は半分が消え失せうることうけあいじゃ。

### 《第三折》

〔末扮敬徳上〕

〔校〕なし

〔訳〕「正末が尉遲敬徳に扮して登場」

《雙調》【新水令】你今日太平也不用俺舊將軍。呀來ヌ(來)把這厮豁惡氣建您娘一頓。可知道家貧顯孝子、直到國難(顯)用功臣。如今面南成(稱)尊。便撇在三限里不以倣問。

〔校〕○建……寧本は「鍵」に改める。○顯用功臣……鄭・徐・寧本は「用功臣」に改める。前の句に「顯」字があるため誤って混入したか。

○面南成尊……鄭本は「南面稱尊」、隋・徐・寧本は「面南稱尊」に改

める。

〔注〕○太平不用……元刊本「東窗事犯」第一折正末云「太平不用舊將軍、信有之(太平になれば元將軍は必要ない)とはまことじゃ)」など元曲に用例が多い。「太平不用」は、宋の范成大「望金陵行闕」詩に「太平不用千尋鎖(太平の世なれば長江ふさぐ千尋の鎖などは必要ない)」、宋の胡仲弓「寄楊蘊古」詩(『葦航漫遊稿』卷四)に「太平不用干戈策(太平の世なれば作戦などは必要ない)」、元の李繼本「呈縣公并東判詩長司」詩(『一山文集』卷一)に「只今太平不用武(今は太平の世、武は必要ない)」など、宋元期に用例が多い。「舊將軍」は、通常は胡曾「詠史詩」【霸陵】に「霸陵誰識舊將軍」とあるように、前漢の李廣の故事を踏まえて用いられるが、ここでは実権を失ったという側面だけから用いられているようである。○這厮……誰をさすのかはつきりしない。ここで元吉のことを言うのは唐突に過ぎる。召使いに八つ当たりしていると見るべきか。○豁惡氣……「豁」は怒り・憂いなどをはらすこと。多く不可能型で用いられる。元刊本「單刀會」第四折末尾【太平令】「尚古自豁不了我心下惡氣(それでもまだわが心中の怒りはおさまらぬわ)」。○建……鄭本は、第四折【伴讀書】「看元吉將天靈健」の「健」と同じで、打つという意味の俗語であろうと推定し、徐本も第四折の用例と同じであろうと推定した上で、意味はともに不明とする。寧本は「鍵」に改めて「太鼓のばちのことをさす。ここでは打つこと」とするが、動詞の用例が他にないことから考えても無理な推論かと思われる。ここでは鄭本の推定に従って訳しておく。○您娘……罵語。元刊本「老生兒」第四折【碧玉簫】「我狠剝你娘三行棍(きさまを三度(?)棍棒でひどく

ぶんなぐってやる」。○家貧顯孝子、國難用功臣……「虎頭牌」(元曲選本)第一折【金盞兒】に見えるような「常言道家貧顯孝子、國難識忠臣」という形での用例が多い。○三限里……誰も相手にしないような場所。元刊本「東窗事犯」第三折【金蕉葉】に「臣出氣力軍前陣後。剗地撇俺在三限里不徹(私は戦場で頑張ったものを、なんとまあ我々を片隅にほっぽり出してお構いなしとは)」と非常に類似した表現があり、この「三限里」は、「三限里」と音の通じる「三閑里」の誤りではないかと思われる。

〔訳〕今日太平の世になると、われら古い將軍には用なしというやつじゃな。やっ、この腹立ちをぶちまけてこいつめを一発なぐってやりたいわ。まったく「家貧しくして孝行な子が現れる」というもので、「国難ければ、功臣用いらる」ということになるが、南面して天子を稱するようになられた今となっては、俺のことなぞ片隅におっぽり出してお構いなしだ。

【駐馬聽】想我那撞陣充(衝)軍。百戰功名百戰身。枉與你開疆展土、也合半由天子半由臣。俺沙場上經歲受辛勤。撇妻男數載無音信。剗地信別人閑議論。將俺胡羅惹沒淹潤。

〔校〕○充軍……隋・鄭・徐・寧本は「衝軍」に改める。

〔注〕○撞陣充軍……元刊本「追韓信」第三折【二煞】の後の白も「楚重瞳殺的怕。撞陣充軍、走的慌(楚の重瞳〔項羽〕は戦いの末に恐れ、軍勢を突き抜けてあわてて逃げましょう)」と、「撞陣充軍」という表記をする。元来は各本が改めるように「衝軍」もしくは「冲軍」であるべ

きだが、「充軍(犯罪者を軍人として辺地に流すこと)」という単語が普通に用いられていたために、こうした表記が一般化したものであろう。

「撞」と「衝(冲)」はともにぶつかるという意味で、「冲州撞府(どさまわり)」といった熟語や、演劇用語「撞上」と「冲上」がともに突然登場するという意味で全く同じように用いられるなど、常にペアで現れる。○百戰功名百戰身……ふつうは「半紙功名百戰身(百戦の身に紙ペラ半分ほどの功名)」。「哭存孝」(内府本)第二折【採茶歌】「怎生來太平不用俺舊將軍。半紙功名百戰身。轉頭高塚臥麒麟(どうして太平になればわれら古い將軍は用なしとなるのやら、百戦した身でありながら手柄は紙切れ半分、振り返れば高い墓に麒麟の石像が横たわっているばかり)」など。○半由天子半由臣……「遇上皇(于小殺本)第三折趙光普云「休言天下王都管、半由天子半由臣(天下は王がすべて仕切るものといったもうな、半分は天子、半分は臣下の手柄)」など。○撇妻男數載無音信……尉遲敬徳は妻子と生別して従軍した。詳しくは「小尉遲」雜劇及び『大唐秦王詞話』第二十六回参照。○沒淹潤……淹潤はやさしさ。打ち消すと容赦がないこと。元刊本「替殺妻」第二折【端正好】「若是俺哥哥一一從頭問。看我數說你一會無淹潤(兄上が初めから一つ一つ問われたら、おぬしのことを容赦なく言うゆえそう思え)」。

〔訳〕敵陣を突いて戦い、百戦して百戦に手柄を立てたのも、お前のためにむだに国土を広げてやっただけのこと、半分は天子、半分は家臣の手柄であるものを。戦場では長年辛抱に耐え、何年も女房子供ほうり出し、便りもないままじゃ。なんとまあ他人のくだらぬ話を信じ込み、この俺に容赦なく無実の罪を着せるとは。

【步步嬌】便折末爛剉得我尸骸爲泥糞。折末金瓜打碎我天靈盡。既然俺不怨恨。問那廝損壞忠臣佞詞因。咱那亢金上聖明君。則但般着半句兒十分地信。

〔校〕○亢金上聖明君……隋本は「亢金殿上聖明君」、徐本は「亢金椅上聖明君」に改める。○般……鄭・徐・寧本は「搬」に改める。

〔注〕○既然……通常は「了」である以上」といった意味だが、この場合意味を取りにくい。「俺不怨恨」ということを前提にして、それでも次のようなことを問いたいということか。○詞因……法律用語。供述。『元典章』卷四十二「刑部四 老幼篤疾殺人 篤疾傷人杖罪斷決」「中書兵刑部來申杜恩禮毆死褚堅取到一千人詞因（中書兵部・刑部が、杜恩禮が褚堅を撲殺した事件について取った関係者の供述を上申してきた）」、「後庭花」（古名家本）第二折【牧羊關】「我可也無詞因上木驢（何の言い分もなく処刑用の木の驢馬に乗りましょう）」など用例多数。後者の例が示すように、時に「言い分」のニュアンスを帯びる。○亢金上聖明君……「亢」は二十八宿の一。亢宿四星は天子とその宮廷の象徴とされる。西にあることから「亢金」といい、天子の象徴である龍と結びついて「亢金龍」という言い方も頻出する。元刊本「趙氏孤兒」第四折【尾】に「我與亢金上君王做的主（亢金の上なる君のために働こう）」とあるように、「亢金上」のみで「朝廷の」という意味になるので、隋本や徐本のように字を補う必要はなからう。○般……「搬」に同じ。ほとんど区別なく用いられる。

〔訳〕たとえこの身が泥や糞のように切り刻まれようと、金瓜で頭を叩きつぶされようと、恨みに思うわけではないが、それでも忠臣を陥れた

あいつの邪な言い分だけは問いたださねばならぬ。朝廷の我が君も、ほんの二言三言唆されれば、すっかり信じ込んでしまわれるとは。

【攪箏琶】我便手段施呈盡。剗地罪過不離身。俺那沙場上我（武）藝僻合、它每枕頭邊關節兒更緊。他每親父子、俺然是舊忠臣。則是四海它人。比它是龍子龍孫。則軍師想度、元帥尋思、休又（休）是它每親的到頭來也則是親。怎辦（辨）清渾。

〔校〕○我藝……隋・鄭・徐・寧本は「武藝」に改める。○僻合……鄭本は「僻合」に改める。○則軍師想度、元帥尋思、休又（休）……徐・寧本は帶白とする。ここは二字もしくは四字の句を増句してよい場所なので、帶白に取る必要はない。○辨……隋・鄭・徐・寧本は「辨」に改める。

〔注〕○手段……手腕、手並み。元刊本「薛仁貴」第一折【醉扶歸】「薛仁貴箭發無偏曲。手段不尋俗（薛仁貴の矢にそれるものどてなく、腕前は並々ならず）」など。○僻合……不明。鄭本のように「僻」に改めた場合、『董西廂』卷二【紅羅襖】に「僻過鋼槍、刀又早落（鋼の槍をよけるや、はや刀が落ちてくる）」とあるように、よけるという意味があるので、「よけてはまた戦う」ということで何度も戦いを繰り返すこと、あるいは「僻」は「劈」と通じて「斬る」「たたきつぶす」という意味になることがあるので、「合」を戦いの回数を数える量詞と見て、「斬りあった」と取るなどの解釈が考えられる。更には「闊闔」と音通と考え、「開く」と「付く」ことから合戦することと見ることもできるかもしれないが、確かなことは言えない。○枕頭……なぜこの語が出てくる



のかは定かではない。『大唐秦王詞話』などには、高祖の妃である張貴妃と尹貴妃が建成・元吉と結んで李世民・尉遲敬徳らと敵対することになっており、この二人の貴妃が寝物語に讒言することを言うのかもしれない。○四海他人……全く無関係であること。『論語』「顔淵」の「四海皆兄弟也」をもとにして裏返した言い方であろう。宋の晁迥の『法藏碎金録』卷三に「營四海他人之事」と見える。「哭存孝」(内府本)第一折李存孝云「亞子終是親骨肉、我是四海與他人(李亜子は結局実の息子、わしは全く他人の身)」、「敬徳不伏老」第一折【前腔(寄生草)】「他須是一枝一葉、俺須是四海他人(奴は同じ一族、わしは他人の身のはず)」。○軍師……この曲の前で李世民と徐茂公が訪問してくるものと思われる。○親的到頭來也則是親……身内はどこまでいっても身内。「救風塵」(古名家本)第三折【煞尾】「則這緊的到頭終是緊、親的原來只是親(近いものはどこまでいっても近く、身内は元來身内以外のものではない)」と、通常は「親的原來只(または則)是親」の形で出る。【訳】わしが腕を存分に發揮しようと、なぜかまたいつでも罪がついて回りおる。わしらが戦場で武芸ふるっていくさするより(？)、やつらが枕もとで付けるコネの方がずっと効き目があるんだ。やつらは実の親子、俺は昔からの忠臣とはいえ、所詮は赤の他人、皇帝の子孫のあいっとは比べようありません。軍師どのお考えください、元帥様思ってもください、もうやめじややめじや、身内はどこまでいっても身内、善し悪しの区別などありはせぬ。

【沈醉東風】我也曾箭《斲》射疊着面門。刀斲劈咬着牙根。也曾殺的槍

桿上濕漉漉(漉)血未乾、馬頭前古鹿ヌ(鹿)人頭滾。滅了六十四處煙塵。剗地信佞語讒言損害人。因此上別了西府秦王處分。

【校】○箭射……鄭・徐・寧本は「箭斲射」とする。この句と次句は三四リズムの七字句で、次句との対の関係から考えても「我也曾」が欄字と思われる以上、一字脱落していることは明らかであるから、次句と同じ「斲」を補うのが穩当であろう。

【注】○疊着面門……「面門」は顔。『臨濟録』卷三「赤肉團上有一位無位真人、當從汝等諸人面門出入(肉体に一人の無位の真人がおわして、おぬしらの顔から出入りしている)」など、用例多数。肉体の部分に「門」を付して呼ぶことについては、「頂門」「眉門」「額門」「腦門兒」などの例がある。「疊」については意味をとりにくいが、「折疊」がしわを意味することがある点からすると、「疊面門」で「顔をしかめる」ということかと思われる。○槍桿……槍の柄。『三國志平話』上「打折賊軍槍桿、勿知其數(賊軍の槍をたたき折ること数知れず)」。○別了西府秦王處分……「西府秦王」とは、『大唐秦王詞話』第一回到、李建成を太子として東宮に置いて英王に封じ、「世民上馬管軍、下馬管民、封西府秦王(李世民は馬に乗っては軍を管轄し、馬を下りては民を管轄することとして、西府秦王に封じました)」とあるように、白話文学の世界において、東宮に対応するものとして李世民に与えられた肩書き。「處分」は命令。元刊本「周公攝政」第二折【普天樂】「百官每聽處分(百官は命を聞き)」など。「別了」は命令などに背くこと。『元典章』「臺綱一 内臺 整治臺綱」に「別了體例行呵、他每不怕那甚麼(きまりに背いて行動したら、恐れずにすもうか)」など、蒙文直訳体に例が多い。直訳体以外でも、『琵琶

「琵琶記」(陸貽典本)第十七出【前腔(三換頭)】に「他奉着君王詔、怎生別了他(あちらはみかどの詔を奉じているのに、どうして楯突くんです)」と云うような例がある。

【訳】わしは顔をしかめて弓を引き、鹵を食いしばって刀で斬り合い、槍の柄はぬるぬると血の乾くこととてなく、馬の前にはごろごろと人の首が転がるという有様にて、六十四箇所の群雄を滅ぼしたものを、何と讒言をむざむざと信じ込んで人を殺そうとされるとは。それゆえ西府秦王様のご命令に楯突いたので。

【川卜(撥)棹】聽元帥說元因。心頭上二千團火塊(塊)滾(滾)。氣的肚里生嗔。愁的似地慘天昏。恰便似心内火滾(滾)。好交人怎受忍。

【校】○川卜棹……隋・鄭・徐・寧本は「川撥棹」に改める。○火塊滾……隋・鄭・徐・寧本は「火塊滾」に改める。なお、注に引く「魔合羅」の用例も「火塊」という表記を用いている。○心内火滾……隋・鄭本は「心内火滾」、徐・寧本「心内火焚」に改める。

【注】○一千團火塊……一千の火のかたまり。元刊本「魔合羅」第一折【憶王孫】「火塊(塊)似燒肺腹(腑)(火の塊のようにめらめらと肺腑を焼く)。「團」を火の量詞に用いる例としては、『董西廂』卷三【鬪鶴鵝纏令尾】「馬領繫朱纓棹棹來大一團火(馬のあぎとにつないだ朱い手綱は、かごほどもある火の塊のよう)」がある。○地慘天昏……歐陽修「葛氏鼎」詩に「天昏地慘鬼哭幽。至寶欲出風雲愁(天地は暗く幽霊の鳴き声はかすかに、至宝が現れようとする時風雲も愁える)」と見えるように、天地が暗くなることだが、悲しみの描写に用いられることは、

元刊本「替殺妻」第四折【折桂令】「弟兄子母別離。哭哭啼啼。切切悲悲。百忙里地慘天昏、霧鎖雲迷(兄弟母子の別れ、ひどく泣き、深く悲しむ折しも、やにわに天地は暗く、雲霧に閉ざされた)」からも察せられる(ただし「替殺妻」の状況がよく分からないので、現実に天地が暗くなっている可能性もある)。○心内火滾……徐・寧本が「心内火焚」と改めるのは、第二句と韻字が重複することを避けるためである。ただ、『元曲選』以前のテキストでは同語の反復や韻字の重複をそれほど避けない傾向があり、本劇でも再三同じ単語や韻字が用いられている点から考えて、改める必要はなからう。一応原文通りに訳しておく。

【訳】元帥どのがことの起こりを話されるのを聞けば、心の中では一千の火の塊が転げ回る。怒りで腹の中は煮えくり返り、愁いのあまりに天も地も真つ暗。あたかも心のなかは火が転げ回るかのよう。どうして我慢できましようか。

【七弟兄】這的是聖恩。重臣。休看我發回村。他雖是金枝玉葉齊王印。我好煞則是塔下的小作軍。也是痴呆老子今年命。

【校】○痴呆老子……鄭本は「痴呆孝子」に改める。○今年命……「命」は庚青韻に属し、本折の眞文韻と合わないことから、鄭本は「今年運」の誤りではないかとする。ただし、『董西廂』では眞文・庚青は通韻。元曲においても庚青と眞文の通韻かと疑われる例は元刊本「調風月」第一折【鵲踏枝】「人得房門。怎回身。廳獨臥房兒、窄く(窄)別(別)、有甚鋪呈」の「呈」のようにまれにある。

【注】○聖恩・重臣……意味を取りにくい。「重臣」を呼びかけと見て、

「重臣どの、見たもうな」と取ることも可能だが、とりあえず「聖恩を受けて重臣ということになる」と考えておく。○發回村……凶暴なこと、野暮なことをする。『西廂記』（弘治本）卷五第三折【么】「訕筋、發村。使恨。甚的是軟款温存（八つ当たりして、野暮な乱暴、粗暴な振る舞い、やさしさのかけらもない）」、「燕青博魚」（内府本）第二折【後庭花】「我割舍的發會村（思い切つて乱暴してやるぞ）」など。「回」は量詞。○小作軍……意味を取りにくいのが、「做軍」で軍籍に入ることという例があるので、下つ端軍人ということか。○痴呆老子……文脈から言えば元吉のことを罵つて言っているように思われる。「老子」を「老いぼれ」という罵言として用いる例としては、「李逵負荊」（元曲選本）第一折【賞花時】に「呆老子、常言道女大不中留（馬鹿じじい、娘は大きくなつたら家に残すものではないというじゃないか）」など多数あるが、まだ青年のはずの元吉に対する言葉としては不自然である。老人以外をも含む可能性のある例としては、元刊本「范張雞黍」第一折【天下樂】の「赤緊的翰林院老子每錢上緊（全く翰林院の「老子」どもは金に汚い）があるが、これも「老いぼれ」というニュアンスを持つものかもしれない。「老子」は老人の自称として用いられるほか、現代においては「羅子」と通じる粗暴な口調の自称としても用いられ、元雜劇においても「忍字記」（息機子本）第一折の劉九兒の白に「劉均佐看財奴、少老子一貫錢、怎麼不還我（守錢奴の劉均佐め、おれから一貫借りておいてどうして返さねえんだ）」とあるのはその例のように思われる。尉遲敬徳の自称としてはふさわしいが、「下つ端兵士なのは、この間抜けな俺様の今年の運命」と取ると前句からのつながりが悪い。ここでは仮に元吉を指すもの

と取つて訳す。

【訳】これぞ陛下のありがたいご恩のおかげにて、わしも重臣になったということじゃ。ずいぶん粗暴ぶりなどと言いたもうな。やつは齊王の印綬もつ王家の一族、わしはせいぜい階下に控えるちつぽけな將校にすぎぬとはいえ、これがあのうつけ者めの今年の定めということになりましようぞ。

【梅花酒】你看我發回村。腦（惱）犯魔君。撞着桑（喪）門。我想那榆窠園災（實）是狼。他不若如單雄信。則我這鞭穩打死須定無論。

【校】○腦犯……隋・鄭・徐・寧本は「惱犯」に改める。○桑門……隋・鄭・徐・寧本は「喪門」に改める。○桑門……通常の句格ではこの後にもう一つ四字句があるはずである。○災是狼……鄭・徐・寧本は「實是狼」に改める。原文は「災」という字体であり、「實」の異体字「実」に非常に近い。

【注】○惱犯……怒らせる。元刊本「氣英布」第三折【小梁州】「惱犯我如潑水怎生收（覆水盆に返らずとわしを怒らせる）」など。○魔君……魔王。元刊本「替殺妻」第二折【滾繡毬】「則爲你嚇殺我也七世魔君（お前のせいのでびつくりさせられたわ、七代を経た（？）魔王どの）」。○桑門……通常は「喪門」と表記する。元来は星の名。凶星とされ、喪門神として疫病神の義にもなる。元刊本「焚兒救母」第三折【鬪鶴鶉】「你孩兒掘（撞）着喪門、《遇》着太歳、逢着弔客（このせがれめは疫病神にでくわし、凶神に巡り会い、災神に出会いました）」。○穩……第二折【尾】に見えた「穩情取」に同じく、「必ずや」という意味であらう。

ただし「穩」のみでこういう意味になる例は少ない。あるいは「穩坐」同様「しつかり」という意味か。

〔訳〕わしが怒りにまかせせるのを見るがよい。さながらに魔王を怒らせ、凶神にぶつかったかのようにじゃろう。思うにかの檢窠園での戦はまことに激烈であつたが、やつは單雄信に及びはせぬ。わしのこの鞭が元吉めを打ち殺そうと、定めておとがめはあるまいぞ。

【收江南】水磨鞭來日再開葦。大王怎做聖明君。信讒言佞語損忠臣。好交我氣忿。元吉打死須並無論。

〔校〕なし

〔注〕○開葦……精進開きをすること。「開齋」に同じ。『野客叢書』卷二十二「解菜」「今人久茹素而其親若鄰設酒殺之具以相煖熱、名曰開葦（今の人は、長い間精進を続けた後、身内や近所の人が酒肴を用意して元氣づけることを、「開葦」と名付けている）。よく似た言い回しとしては、『董西廂』卷二「繡帶兒」「戒刀舉今日開齋（戒刀持ち上げ今日は精進開き）」がある。

〔訳〕水磨の鞭も明日はいよいよ精進開けじゃ。大王様はどうして聖明の君でありえよう。讒言信じて忠臣を殺そうとなさるとは、我が腹立ちは収まらぬ。元吉めをわしが打ち殺したとて構うまい。

【尾（鴛鴦煞）】來日鬧垓又（垓）列着軍卒陣。就着哭啼又（啼）接送齊王殯。恨不得待摘膽剜心。剔髓挑筋。唱道待交這虎將難存忠信。向那龍床側近。調泛得君王一惺（星）く（星）都隨順。咱則待剪草除根。直

把這坑陷我的冤讎證了本。

〔校〕○尾……鄭・徐・寧本は「鴛鴦煞」に改める。○一惺く……鄭・徐・寧本は「一星星」に改める。○直把……鄭本は「直上」とする。原本ではこの字の左半分が破損しており、「上」に見えないこともないが、「巴」が右側にかろうじて読み取れるので、文意から言っても「把」でよいであろう。

〔注〕○鬧垓……にぎやかなさま。元刊本「氣英布」第二折【梁州】「齊臻臻領將排兵。鬧垓垓虎鬪龍爭（ずらりと將兵並べ、騒がしく龍虎の争い繰り広げ）」など。○摘膽剜心。剔髓挑筋……元刊本「任風子」第一折【尾】「折末平地昇仙。我將這摘膽剜心手段顯（たとえ平地から昇仙する奴であろうと、このきもを取り出し心臓えぐる腕前を見せてくれようぞ）」、「存孝打虎」（内府本）第二折【尾聲】「比及挑筋剔骨。摘膽剜心、大拳頭搥住嘴縫、闊脚板踏住胸脯（筋を抜き骨をそぎ、きもを取り出し心臓をえぐるとなれば、大きな拳で口をふさぎ、大きな足で胸を踏まえ）」など。○調泛……「調發」に同じ。「雲窗夢」（于小穀本）第一折浄云「酒筵間用言調泛、必然成事（酒の座でうまくそそのかせば、絶対うまくいくだろう）。○一惺惺……通常は「一星星」と表記する。賢いことを意味する「惺惺」と表記が混乱したか。一つ一つ。『董西廂』卷八【賺】「玉簪斑管與絲桐、一星星比喻着心間事（かんざしに筆に琴、一つ一つに私の心事をたとえました）」、元刊本「拜月亭」第三折【叨叨令】「我一星星的都索從頭兒說（一つ一つ初めから申しませう）」など。○剪草除根……根絶やしにする。元刊本「趙氏孤兒」第一折【醉中天】「你白甚替別人剪草除根（どううしていわれもなく他人のために人の家

を根絶やしにしようか」など。○證本……元を取る。「正本」「徵本」「掙本」とも表記する。『董西廂』卷一【牧羊關尾】「便做受了這恓惶也正本」(たとえこの苦しみ受けようと元は取れたというものじゃ)など。

〔訳〕明日はがやがやと兵隊たちが陣立てし、すぐさまめそめそと齊王の棺を迎え見送ることとなる。奴のきもを引きずり出し、心臓をえぐり、髓をほじくり、筋を引き抜いてやりたくてならぬわ。まったくこの虎の如き猛將が忠信の心を失わんばかりにまでなつたしまったのは、やつがかの玉座の側にて、君王をそそのかし、一つ一つすべて言うがままにさせたため。わしらで奴を根こそぎにしてしまえば、わしを陥れた冤罪の恨みも元が取れるというものじゃ。

#### 《第四折》

〔末扮上〕

〔訳〕「正末が(尉遲敬徳に扮して)登場」

《正宮》【端正好】如今罷了干戈、絶了征戰。扶持俺這唐十在文武官員。那回是真个今番演。越顯得俺經熬煉。

〔校〕○唐十在……鄭・寧本は「唐十宰」、徐本は「世界」とする。

〔注〕○扶持……手助けする。劉致【新水令】套「代馬訴冤」「誰念我美良川扶持敬徳(美良川で敬徳を手助けしたことも思ってくれる者はない)」。○十在……鄭・寧本が「十宰」とするのは、汪元亨【朝天子】「歸隱」に「漢室三傑。唐家十宰。數英雄如過客(漢の三傑、唐の十宰、英

雄を数え上げれば過ぎゆく旅人の如し)」などとあるのに基づくものであろう。史書にはこの語は見えず、具体的に誰をさすかは不明だが、「不伏老」第一折徐茂公の白に尉遲敬徳をさして「且唐家十宰是他爲頭將(しかも唐の十宰でも彼は筆頭の大將)」とあり、この場面で唐の十路総管として、房玄齡・徐茂公・殷開山・程咬金・杜如晦・高士廉・尉遲敬徳・秦叔寶が登場しているので、人数が足りないが、ここでは彼らが十宰に該当するものとされているようである。徐本のように「世界」とすれば、「扶持……世界」という定型表現に合致するが、字形が遠く、音も異なり、また「文武官員」というのとも矛盾するので、ここでは「十宰」として訳しておく。

〔訳〕今や戦火は止み、征討も終わった。唐の十功臣を支えてまいった、かの時はまことであつたが、こたびは練習程度のもの。鍛え上げたわしの力をいよいよ見せてくれよう。

【滾繡毬】却受着帝王宣。要施展。顯我那舊時英健。不索説在駿馬之前。我身上不曾掛凱(鎧)甲、腰間不曾帶弓箭。手中不曾將着六沈槍撚。我則是赤手空拳。我坐下剗騎着追風馬、剗(腕)上只飈着打將鞭。我與你出馬當先。

〔校〕○凱甲……隋・徐・寧本は「鎧甲」に改める。○六沈槍……鄭・寧本は「綠沈槍」に改める。○剗上……隋・鄭・徐・寧本は「腕上」に改める。

〔注〕○説在駿馬之前……大法螺を吹くということか。元刊本「替殺妻」第一折【尾聲】「我空説在駿馬之前(大口たたくもあだなこと)」、「玉壺

春」第一折【柳葉兒】「也養的恁滿門宅眷。也是我出言在駿馬之前（あなた方一家全部を養うこともできようと言えば大口がすぎるが）」、「獨角牛」第三折【滾繡毬】「他可也忒自專。説大言。自誇輕健。可是他空説在駿馬之前（奴も勝手がすぎようぞ。大口たたいて、輕捷誇っているが、空しき大言と申すもの）」。○坐下……「尻の下の」ということである。○「坐下馬」で乗っている馬のこと。元刊本「追韓信」第二折【新水令】「坐下馬望（柱）踏遍山水雄、背上劍枉射得斗牛寒（騎乗している馬が立派な山川めぐり尽くすもあだなこと、背中の劍が寒々と星を射すのも空しきこと）」、元刊本「博望燒屯」第三折【步步嬌】「捨死忘生先鋒將。怎禁那一疋坐下馬似龍離浪（命かけたる先鋒の將。ましてや打ち乗る馬は波を離れた龍の如し）」。○追風馬……足の速い馬のこと。曹植「七啓」「駕超野之駟、乘追風之輿（野を超えるかける馬車をかけらせ、風を追う輿に乗り）」、魏・劉邵「七華」「追風馬出自遐裔（風を追う馬ははるかかなたより来たり）」、唐・羅虬「比紅兒詩」「莫言一匹追風馬、天驥牽來也不看（風を追う馬はもとより、天馬を引いてきても見ようとせぬ）」、元刊本「單刀會」第一折【賺煞尾】「那神道須追風騎、輕輪動偃月刀（かの神は風を追う馬に乗り、青龍偃月刀を軽やかに舞わせ）」。○出馬當先……「三戰呂布」（内府本）第三折何蒙云「到來日出馬當先臨陣中、施逞武藝顯威風（明日になれば真つ先に出馬して陣中に出で、武芸發揮し威風示そう）」。

〔訳〕王の詔を賜ったとあれば、むかしの勇猛ぶりを發揮し示してくれよう。大言壯語をいうわけではないが、わしは身に鎧兜を着けもせず、腰に弓矢を帯びもせず、手には六沈の槍をしごきもせず、ただ頼むのは

この腕一つ。鞍もつけず駿馬にまたがり、腕には將軍を打つ鞭一本をなびかせて、いざ真つ先駆けて出陣じゃ。

【佻秀才】这里是竟（競）性命的沙場地。且講不得君臣體面。則怕犯（犯）風流見罪愆。我呵塔地、勒住征驄。立在這邊。

〔校〕○竟性命的……隋・鄭・徐・寧本は「競性命的」に改める。○犯風流……徐・寧本は「犯風流」に改める。○塔地……徐・寧本は「圪塔地」に改める。

〔注〕○風流罪……些細な過ち。色恋の罪という意味もある。「單鞭奪槩」（古名家本）第二折段志賢云「你喚尉遲恭來、尋他些風流罪過、則説他有二心、將他下在牢中、所算了他性命（尉遲恭を呼んできて、些細な罪を見つけ出し、二心があると言いつけて、牢屋に入れ、殺してしまいましよう）」。○呵塔地……これで「圪塔地」「圪塔地」「磕塔地」などと同類の一語であろう。徐・寧本のように改める必要はないものと思われる。

〔訳〕ここは命のやりとりする戦場ゆえ、この場では君臣の礼儀などかまってはおられぬが、ただ恐れるはあらぬ罪を着せられること。グイと戦馬の手綱をしぼり、ここに立つ。

【滾繡毬】我則見御園。怎生送這戰場寬展。却喚強如那亂烘又（烘）地荆棘侵天。我則見嫩茸又（茸）綠莎軟。轉又（轉）翠袖展。撒く（撒）地馬蹄兒輕健。你便丹青巧筆也難傳。我則見皂羅袍都略（掠）濕宮花露。深烏馬沖開綠柳煙。殺氣盤旋。

〔校〕○御園……鄭本は「這御園」に改める。○怎生送……鄭・寧本は「怎生選」、徐本は「怎生送」に改める。○綠莎軟……原本は「綠」字が判読困難。各本すべて「緑」とする。○轉ヌ……鄭本は「□轉轉」、徐本は「宛轉轉」、寧本は「寬轉轉」に改める。対の關係から見ても、「轉轉」の前に一字抜けているものと思われる。○略濕宮花露……徐・寧本は「掠濕宮花露」に改める。

〔注〕○送……鄭・寧本が「選」とするのは、第二句が押韻する三字句であるため。略字体なら「選」の字形はかなり「送」に近い。ただし、第一句も三字であるにもかかわらず、「御園」が二字しかないことから考えて、「則見」と「御園」の間に三字句もう一句と、「御園」の前にあるべき一字が脱落していて、抜けている句と「御園」で第一・二句であった可能性がある。その場合には「送」は第三句の前の襯字になるので押韻の必要はなく、「(分量的に)ゝに及ぶ」という意味の「送」の方がふさわしいことになる。○綠莎軟……早くは韋莊「觀軍廻戈」詩に「御苑綠莎嘶戰馬(御苑の緑の草に戰馬はいななく)」とあり、明初の王綬の「端午賜觀騎射擊毬」詩(『王舍人詩集』卷二)に「一望晴烟綠莎軟、萬馬騫騰鼓吹喧(遠く見れば晴れた空のもと靄たなびく中緑の草は柔らかく、あまたの馬はたけり鼓笛の音もにぎやか)」ということ同一の表現があつて、やはり練兵場の情景である。当時ある程度定型化した表現だったものと思われる。○略濕……徐・寧本は「掠濕」とする。かすかにふれてぬれることか。元刊本「竹葉舟」第三折【罵玉郎】「露寒掠濕蓑衣透(露は寒く、蓑を湿らせて裏までしみ通る)」、「倩女離魂」(古名家本)第二折【調笑令】「向沙堤款踏。莎草帶霜滑。掠濕湘裙翡翠紗

(砂の堤をゆつくり踏みしめて行けば、草は霜が降りて滑りやすく、緑のうすぎぬのスカートをしめらせる)」。○宮花露・綠柳煙……「宮花露」の早い例としては、宋の王禹偁の「詔臣僚和御製賞花詩序」に「競剪宮花、露濕冠纓(競つて宮中の花を切り、露は冠の纓をぬらした)」とあり、更に元末明初の劉嵩の「公文傑尚書由參政山西入拜禮部……」詩(『槎翁詩集』卷六)の其二には「錦袍潤滬宮花露、驄馬嘶御柳烟(錦の上着は宮中の花の露にぬれ、あおうまは靄の如く生い茂る御苑の柳にいななく)」と、「宮花露」と「綠柳煙」と非常に似通つた組み合わせで用いられていて、ともに宮中の描写であることも共通する。○深烏馬……尉遲敬徳が乗る馬。「單鞭奪槩」(古名家本)楔子の敬徳の白に「你若不信、將我這火尖槍、深烏馬、水磨鞭、衣袍鎧甲、您先將的去、權爲信物(もし信じられぬとあれば、わしの火尖槍、深烏馬、水磨鞭とひたたれによるいかぶとを持って行って、人質代わりにせい)」。この前の「皂羅袍」も前に見たように尉遲敬徳の衣装であり、ここは敬徳の行動を自身目から描写したものであろう。

〔訳〕見れば御苑は、かの戦場の広きにいかで及ぼう。なれどかの天を衝かんばかりに荊が乱れ生い茂る戦場にははるかにまさる。見ればしつとりとした緑草柔らかく、たおやかな女子が居並び、さつそうと馬の蹄も軽やかに、絵にも描けない素晴らしさ。見れば黒いひたたれが宮殿の花の露に濡れ、真つ黒な馬が靄のように生い茂る緑柳の中を突き抜けるや、殺気が渦巻く。

【倘秀才】那廝門旗下把我容顏望見。則諛得那廝鞍心里身軀倒偃。則看

你再敢人前説大言。這廝爲甚麼、則管里廝俄延。不肯動轉。

〔校〕なし

〔注〕○動轉……動くこと。打ち消し・反語でよく用いられ、「逃げ出す」といったニュアンスになることもある。元刊本「替殺妻」第一折【公篇】「嚇的我手兒脚兒滴修都速難動轉（びつくり仰天、手足も震えて動けない）」。

〔訳〕奴は門旗のもとでわしの顔を見るや、仰天して鞍の上に身を伏せる。このうえ人前で大言を吐けようか。このやろうめ、どうしてぐずぐずしてばかりで、動こうとしないのだ。

【呆古朶】那廝管見我這單英雄屈死的冤魂兒。嗩你今日合交替他生天。

這的又打不得關節、立不得正（證）見。你也難把殘生免。你則照管着天靈片。你待變龜來難入水、化鶴來難上天。

〔校〕○冤魂見……隋・徐・寧本は「冤魂現」に改める。○正見……隋・鄭・徐・寧本は「證見」に改める。

〔注〕○變龜來難入水、化鶴來難上天……成語と思われるが出典不明。さまざまな生物に変身して逃れる例としては、『西遊記』第六回・第六十一回などに見える変身合戦がよく知られている。

〔訳〕奴めは必ずや恨みを呑んで死んだ単英雄の亡霊の姿あらわすを見ることになろう。それ、今日こそお前をやつに替わつて天に昇らせてやる。今度ばかりは賄賂で渡りをつけることもできず、証人立ててごまかすこともできないぞ。ろくでもないその命、保てるなどと思うでない。せいぜい脳天いたわるがよい。亀に姿を変えたとして水に逃げ込むことも

ならず、鶴に化けようと天には昇ることなどできぬ相談。

【叨叨令】那廝槍尖兒武藝都呈遍。被我遮截架隔難施展。這廝■（輪）羸盛（勝）敗登時現。〈見〉存亡死活分明見。嗩論（輪）到打也末哥、ヌヌ（輪到打也末哥）、這番交馬應無善。

〔校〕○■羸盛敗……隋・鄭・徐・寧本は「輪羸勝敗」に改める。○見存亡死活……鄭・徐・寧本は「見」を削る。直前の「現」及びこの句末尾の「見」との関係で紛れ込んだものであろう。なお、【呆古朶】からこの曲にかけて「見」「現」が何度も韻字に用いられている点は注意される。こうした同一韻字・同一語・類似表現の反復は、題材的に共通する「單鞭奪槩」にも認められる。○論到……各本は字を改めないが、「輪到」とすべきであろう。

〔注〕○遮截架隔……防ぐ。四種の防ぎ手の技を列挙したもの。『董西廂』卷二【伊州袞纏令】「辨得箇架格遮截、欲勝那僧人碁上碁（何とか防ぎの手を使うばかりで、かの坊主に勝たんとするのは難中の難）」ほか。なお『輟耕録』卷二十五「院本名目」に列挙された金の院本の題名のうち、「衝撞引首」の項に「遮截架解」という名が見える。○無善……たいへんなこと。「不善」に同じ。「牆頭馬上」（古名家本）第一折祇候云「小哥使張千去、若有人撞見這頓打可不善也（ぼっちゃまは私に行けとおっしゃいますが、もし人に出くわしたら、こっぴどく殴られますよ）」。

〔訳〕奴は槍先にて持てる武芸の限りを尽くすも、わしにあの手この手で防がれて腕の見せようもなし。こやつは勝敗はたちまちに判明し、命の存亡も明らかじゃ。さあ、おれが打つ番だ、おれが打つ番だ。こんど



の勝負はえらいことになるぞ。

【伴讀書】則見颯又（颯）地因（陰）風剪。將這昏澄又（澄）塵埃踐。不刺又（刺）征驍似紗燈般轉。都速又（速）把不定渾身戰。看元告將元吉吳（天）靈健。見元帥到根前。

〔校〕○因風……隋・鄭・徐・寧本は「陰風」に改める。○昏澄又……鄭本は「昏沈沈」に改める。○看元告……隋・徐・寧本は「看元吉」に改め、鄭本は不明とする。○將元吉吳靈健……鄭本は「將元吉天靈健」、徐・寧本は「將天靈健」に改める。

〔注〕○剪……風が吹く。孟郊「奉報翰林張舍人見遺之詩」「風剪葉已紛（風に切られたように葉ははやはらはらと）」、元刊本「遇上皇」第二折「一枝花」「雪遮得千樹老、風剪得萬枝枯（雪におおわれて千樹老い、風に吹かれて万枝は枯れる）」。○昏澄澄……暗くぼんやりしたさま。『西遊記』雜劇第二十三出【鬼三台】「昏澄澄。白茫茫。桑田變海海為桑（暗々と、白々と、桑畑は海となり海は桑畑となる）」。「昏沈沈」とも表記する。趙明道【鬪鶴鶉】套「題情」【禿厮兒】「悶厭厭愁心怎熬、昏沈沈夢斷魂勞（くよくよと愁いの思いにたえられず、ぼんやりと夢も断たれて魂は疲れる）」。○塵埃踐……砂塵の舞う地を踏みしめて進むこと。元の葉楚庭の「九日」詩（『鄱陽五家集』卷九）に「城中車馬踐塵埃（城内では車馬が砂塵を踏みしめて行く）」と見える。元刊本「東窗事犯」第四折末尾【後庭花】「馳驛馬踐塵埃。度過長江一派（驛馬駆けらせ砂塵を踏んで、長江の流れを越え）」など。○紗燈般轉……走馬灯のように回る。「存孝打虎」（于小穀本）第三折【禿厮兒】「我則見紗燈兒般轉

到十數匝、我看你怎生收煞（見れば走馬燈の如くにめぐること十數回、さてどうけりをつけるのか）。『三国志演義』（嘉靖本）「虎牢關三戰呂布」「三箇圍住呂布、轉燈般厮殺（三人は呂布を取り囲み、走馬燈のように戦いました）」。○看元告將元吉……徐・寧本は「元告」を「元吉」に改め、あとの「元吉」を削るが、次句にも「元帥」という語が見える点から考えて、「元」のつく単語を三つ集めて「三元（科挙で三度の試験すべてに首席合格すること）」の語呂合わせをしている可能性が高からう。「元告」は原告というに同じ。元刊本「周公攝政」第四折【沽美酒】「如今被論人當了罪責、不想那元吉（告）人掩（安）然在（人に訴えられ罪に当てられた今になって、何と原告が無事におろうとは）。○天靈健……第三折【新水令】「把這厮豁惡氣建恁娘一頓」の「建」と同じであろう。「打つ」という意味か。この場面で一度目の「奪槩」が行われるものと思われる。

〔訳〕見ればサッサッと寒風は身を切るように吹き、暗くなるほどに立ちこめる砂塵踏みしめ、パカパカと戦馬は走馬灯の如く駆けめぐれば、ブルブルと全身ふるえが止まらぬ様子。見よ、訴え出でたこのおれが元吉めの頭を打ち砕くのを。ふと見れば元帥どのがこちらへまられる。

【笑和尚】恁く（恁）く（恁）弟兄每厮雇（顧）戀。俺く（俺）く（俺）臣宰每實埋怨。休又（休）又（休）終久是他親眷。喙又（喙）《喙》這鐵鞭。你又（你）又（你）合請奠。來く（來）く（來）俺且看俺西府秦王面。

〔校〕○雇戀……隋・鄭・徐・寧本は「顧戀」に改める。○喙又……鄭

徐・寧本は「嚙嚙嚙」に改める。○請奠……徐本は「請佃」に改める。

〔注〕○請奠……徐校に言うように、「請佃」と同じ語であろう。受け取る義。元刊本「拜月亭」第四折【阿忽令】「把你這眼前。厭倦。物件。分付與他別人請佃（あなたの目の前の気に入らないものを、他の人にあげてうけとつてもらいなさい）」など。

〔訳〕お、お、おまえら兄弟たちは未練が残り、わ、わ、われら臣下はまことに恨みがつる。やめよやめよやめよ所詮やつらは親族どうし。チエッ、チエッ、チエッこの鉄鞭を、お、お、おまえが頂戴するはずのところであつたが、さあさあさあまづは西府秦王様の顔を立ててやろう。

【倘秀才】我接待待使些兒控（空）便。是誰班住手不能動轉。把這厮不打死呵朝中又弄權。他若（苦）哀告、意懸く（懸）。赦免。

〔校〕○控便……鄭・徐・寧本は「空便」に改める。第二折【牧羊關】「我得空便也難相從」。○班住手……隋本は「搥手」、徐本は「扳住手」に改める。○若哀告……鄭・徐・寧本は「苦哀告」に改める。

〔注〕○班手……隋本の「搥」と徐本「扳」は通用字。手を引っ張るところ。元刊本「遇上皇」第二折【菩薩梁州】「這書一箇學（擧）霜毫一箇班着臂膊一箇把咱扶着（この手紙として一人は白い筆をあげ、一人は腕を引っ張り、一人はわしを支える）」○ここでもう一度「奪槩」があるものと思われる。あと一度がどこでなされているのかはよくわからない。〔訳〕わしが槍を受け止めこの隙を狙おうとするところを、手を引っ張って動けなくするのはどいつじゃ。こやつを殺さねば、朝廷でまた権力を弄びましょう。なれど秦王さまはねんごろに訴え、いたく気になるご様

子で、許してやってくれとおっしゃる。

【滾繡毬】我嚙不待言。不近前。你也不分良善。又不是不知我抱虎而眠。這厮不納賢。不可憐。不送俺一遍。交這厮落不的个尸首元（完）全。這厮不彫拆（折）脊梁也難消我這恨、把這《厮》不打碎天靈沙怎報我冤。怎不交我忿氣冲天。

〔校〕○嚙……隋・徐・寧本は「煞」に改める。○元全……鄭・徐・寧本は「完全」に改める。○拆……鄭・徐・寧本は「折」に改める。○把這……鄭・徐・寧本は後に「厮」を補う。○沙……徐・寧本は「吵」に改める。表記の安定しない文字ゆえ、特に改める必要はない。

〔注〕○嚙……「雖」に同じ。『董西廂』卷三【御街行】「這書房裏往日嚙曾來、不曾見這般物事（この書齋にはこれまですいぶんまいりましたが、こんなものは見たことがありませんでした）」。「煞」と表記しても同じ意味。○不分良善……「良善」は善良な心。「不分良善」は善良な心をもたない（わきまえない）。「蝴蝶夢」（古名家本）第三折【上小樓】「教人道桑新婦不分良善（人から何が好いことをわきまえないぬ悪い女と言われましょう）」○抱虎而眠……不安なさま。北宋の何去非の「西晉論」に「其言反復切至、皆恬然不爲省、方抱虎而熟寐尔（切実な言葉が繰り返されたのに、みな安心しきつて気にかげようとせず、虎を抱いて熟睡しているような有様であった）」（『皇朝文鑑』卷一百）とある。より近い形では南宋の辛棄疾「進美芹十論」に「是猶抱虎而寢、指虎之終不噬已也（虎を抱いて寝ながら、どうせ虎が自分をかむことなどないと思つていようなものです）」（『歷代名臣奏議』卷九十四）などがあ

り、政治的な文書では頻用される定型表現のようである。白話文学でも、

『西遊記』（李卓吾批評本）第九回に、「受爵的、抱虎而眠。承恩的、袖蛇而走（爵位を受ける者は虎を抱いて眠り、君恩をこうむる者は蛇を袖に入れて歩くようなもの）」といった形で用いられる。○不送……「送」はひどい目にあわせる、葬り去るという意味。「不送」は反語。元刊本「紫雲庭」第三折【鬪鶴鶉】「若是共別人並枕同床、他便不送得我披枷帶鎖（他の人と一緒に寝たりしたら、あの人は私を枷や鎖につながられるような目にあわせるでしょう）」。○落不得个尸首元全……「元全」は「完全」の誤り。「落不得」は「く」ということもできないまになる、「完全尸首」は首と胴が繋がった死体。定型表現と思われる。元刊本「單刀會」第二折【滾繡毬】「你爲漢上九座州。我爲筵前一醉酒。咱兩箇落不得箇完全尸首」（あなたは漢水のほとりの九州ゆえに、私は宴席での一酔ゆえに、首が繋がった死体であることもできなくなりましょう）。

〔訳〕わしはもの言いたくもなければ、近づきたくもないが、それにしてもあなた（元帥）は善悪がおわかりではない。わしが虎を抱いて眠るごとき危うい立場なのを知らぬ訳でもあるまいに。こやつは賢者を容れることなく、憐れみをかけることもなく、わしをひどい目にあわせおつたではないか。こやつめ首を保つこともできぬようにしてくれよう。こやつは背骨をたたき折らねばわが恨みは晴れぬ。こやつを頭をかち割らねばわしの仇は討てぬ。わが怒り天を衝かずにおられぬわ。

【快活三】謝吾皇把罪愆免。打元吉喪黃泉。我這里曲躬又（躬）的朝拜

怎敢訛言。再把天顏現。

〔校〕○怎敢訛言……徐本は「怎敢俄延」に改める。○天顏現……徐本は「天顏見」に改める。

〔注〕○訛言……『毛詩』「小雅」の「沔水」に「民之訛言、寧莫之懲（民の流言、どうして正さぬ）」とあり、同じく「正月」にも同一の表現が見える語で、元来は事実無根のうわさ話のこと。元刊本「七里灘」第二折【鬼三台】「休停住。疾廻去。不去呵枉惹的我訛言濼（？）語（とどまるな。早く帰れ。行かねばわしからつまらぬことを言われるはめになるぞ）」、元刊本「介子推」第二折「帶云」割捨了訛言課語、亢（抗）勅違宣（思い切つて雑言申し、勅命に逆らう）」といった用例から見ると、相手にとつて聞き苦しい言葉のようである。○この曲の前で元吉を殺してしまうらしい。これは史実や小説類とは大きく異なる展開だが、こうした自由な展開は雑劇においては珍しいことではない。

〔訳〕ありがたやわが君は罪をお赦しになった。元吉を打つてあの世に送りましたのに。わたしはここに深々とお辞儀して、滅多なことは申しませぬ。もう一度天顔を拝することができました。

【鮑老兒】我吃一萬金瓜也不怨天。則稱了我平生願。元吉那厮一靈兒正訴冤。敢論告它閻王殿。這厮那器（器）浮詐偽、輕薄諂佞、那里有納士招賢。那凶頑狼劣、奸滑校（狡）幸、則待篡位奪權。

〔校〕○器浮……鄭・徐本は「鬻浮」に改める。○校幸……隋本は「僥倖」、鄭・徐本は「狡倖」、寧本は「狡幸」に改める。

〔注〕○鮑老兒……この曲牌で套数が終わる例は少ない。終わり方もや

や唐突なので、この後にまだ曲があったものが脱落している可能性も考えられる。○一靈兒……靈魂。「范張雞黍」第三折【集賢賓】「一靈兒伴孤雲冥冥杳杳（魂はぼつんと浮かぶ雲とともに暗い中を行く）」。元刊本「東窗事犯」第三折【紫花兒序】「三魂兒消消洒洒、七魄兒怨怨哀哀、一靈兒蕩蕩悠悠（魂はさびしく、魄は哀しく、靈ははるかに）」など。  
○閻王殿……閻魔王の役所。死んだらここに訴えるというのは定型表現。「西廂記」（弘治本）卷三第四折「（末云）害殺小生也。我若是死呵、小娘子、閻王殿前、少不得你做箇干連人（ひどい目にあわせてくれましたね。私もし死んだら、お嬢ちゃんや、閻魔王さまのお白砂で、あんたを共犯者として訴えねばなるまいよ）」など。敦煌變文「唐太宗入冥記」に、建成と元吉が李世民を閻王に訴えることを述べる。○鷲浮……騒々しくすること。元刊本「博望燒屯」第二折【紅芍藥】「則要你吞聲啞氣莫鷲浮（声を呑みおとなしくして騒がぬことじゃ）」など。○奸滑校（狡）幸……「狡幸」は「僥倖」「僥幸」などとも表記する。文言の「僥倖」とはやや異なり、ずるいこと、またずるいやり口をも言う。「五侯宴」第一折【混江龍】「他可便心僥幸、倒換過文書（あいつはずるい気を起こして、書類をすりかえた）」、「後庭花」第三折【新水令】「憑着我惟撇劣村沙、誰敢道僥幸奸猾（このわしの剛直粗暴な気性ゆえ、ずるいことを言う度胸のあるやつなどおらぬ）」、元刊本「東窗事犯」第二折【石榴花】「子爲您奸滑（猾）狡佞將心昧（おぬしが狡猾で悪しき心ゆえ）」ほか。

〔訳〕一万の金瓜でなぐられようとも恨みは致しませぬ。それこそ本望かなったと申すもの。元吉めの魂はうらみを訴え、きつとあの世の閻魔

殿で申立てすることだろうが、あやつは浮ついた偽り、薄っぺらなへつらばかりで、賢者を招き容れるようなことなどあるはずもなかった。あのまがまがしい悪辣さ、よこしまな賢さにて、帝位をねらっておったのじゃ。

題目 齊元吉兩爭鋒  
正名 尉遲恭三奪槊

（二〇〇四年九月八日受理）

- (1) (あかまつ のりひこ 京都大学大学院人間環境学研究所助教)
- (2) (いのうえ たいざん 関西大学文学部教授)
- (3) (きん ぶんきょう 京都大学人文科学研究所教授)
- (4) (こまつ けん 京都府立大学文学部教授)
- (5) (さとう はるひこ 神戸市外国語大学外国語学部教授)
- (6) (たかはし しげき 摂南大学国際言語文化学部教授)
- (7) (たかはし ぶんじ 大阪大学大学院文学研究科教授)
- (8) (たけのうち まこと 京都外国語大学外国語学部教授)
- (9) (つちや いくこ 京都府立南陽高等学校講師)
- (10) (まつうら つねお 大阪市立大学大学院文学研究科助教)